

興利岩礦の採掘に還付せしむる旨を郵出せる
趣旨を郵多移附せしむる旨を文海局に
命じ礦政調査局に會同し處、該處
日知軍政官に交渉せしむる旨を軍務部
並り大島に函致し還付方申上る處
大嶋に回答し依り此事に考慮を有し
回答に難きを依り貴外務部より我公

外務省

明治二十九年

係、四年七月に應ずる中、越後を以て可
能に採計すべしと云ふ事
右に依り查るるに、該礦高力一年の採掘
礦產の採掘せしむるに、採掘の採掘に
富強の情況に依り、今更に採掘の採掘に
既、右に依り、採掘の採掘に、採掘の採掘に
此に付、該礦產の採掘に、採掘の採掘に

四月二日付リ内田多作一及内田多作
此田谷ノ橋上ニテ其ノ前記ノ云々ニ接シ
然レ再上即ニ此ノ事ニ及テテ其ノ様
ノ事政長ニ致シテ其ノ様ニ接シ
此ノ所行ノ事ニ及テテ其ノ様ニ接シ
其ノ事ニ及テテ其ノ様ニ接シ

外務省

支那三十二年五月五日附録(第百十号)

12.

明治 年 月 日 起 草

大臣 兼 局長

山内 少輔

要目付

主 任

左 丞

電 報 一六〇三 號
明治 四年 七月 三日 發 出

奉 命 在 場
氏 名 不 詳
三 郎 授 命

山 内 少 輔

貴 電 第 一 五 号 烟 台 炭 坑 件 關 之

苦 筋 之 概 況 結 果 兵 隊 派 出 之 事 果

外 務 省

絶 不 付 實 兵 隊 派 出 之 事 果

其 旨 目 下 在 京 中 之 弁 事 結 果 電

報 了 之 事 右 如 會 也

滿 洲 鐵 道

17

No. 二一〇七
(暗)

宣口奉
本者着
廿九年七月二日後四
七日前二二〇

大臣

林外務大臣

瀬川領事

次官 山座局長ヨリ

政務 第一八号

待電第一五号ニ関シ遼陽軍政署

藤田通譯ヨリ調査ノ結果左ノ通

西川参謀ノ電報アリタリ

我徒来監視セル坑口ハ總テ魚事ナ

ルモ麻細山ヲ除ク外支那人ハ同一

方面ニ於テ割ニ坑口ヲ設ケ開堀シ

和 総 二

13

取調 會計 人事 通商 政務

居レリ然レドモ大平ハ新シキ着手ト
認ムルヲ得ス今日トテモ我監視区域
ノ完全ナラサルヲ之ヲ怨ムル由ナシ
尾明山ニハ去ル四月ヨリ奉天鑛務
委員出張大峪溝ニ於テ官営事務
トシテ開堀ヲ始メ、アリ之ハ昨午旧
曆二月二十日張錫鑾ヨリ奉天軍政
署ニ交渉済ナリト委員ハ物語レリ
其附近ニハ我輕便鉄道ヲ架設シテ
ルモ右土地ハ實際露國買収以外ニ
アリト思ハル露國買収炭山ハ麻細山

ヨリ茨見山迄ニテ所アリトハ土人ノ
説一致セリ

右電報ハ軍政署ノ怠慢ヲ掩蔽セシ
タノ多サ修飾ノ廉アリト認メラレ
角清國人ガ我權利区域内ニ進入シ
辣炭シツ、アル人事實ナルニヨリ往度
第一五号卑見ノ通り不取敢尾明山
大峪溝ノニテ所ヲ除ク外清國人ノ
採掘ヲ禁止シ同時ニ番兵ヲ派シテ
監視セシムル様事筋ハ御交渉アラレ
コトヲ希望ス又藤田通訳電報中

大峪溝採掘ニ付テハ既ニ我奉天軍
政署ト交渉済云々トアルニヨリ總督
府ヨリ同軍政署ハ向合中ナリ

14

17

取調 官計 人事 通商

大臣 榮 2118 (暗)

大連 榮 不 着 三十九年七月七日午後 三二五 四五五

次官 陸 軍 部 長 官 長 官 コリ

政務 信 三 一 号 (要目付)

電報アリタリ 政署ヨリ事實無根ナル旨西川参謀へ

閣下海防府 石

15

明治
第17
明

明治
同
十九
年
九
月
日
發
遣

野
田
一
生

友
中
夫

萩
原
五
郎

乙
五

第1617号
明治29年9月23日
30日

岩倉山

中三の号

烟
草
産
權
件

往
電
第
三
号
南
洋
南
洋
信
務
協
議

ノ
結
果
[REDACTED]

外
務
省

派
遣
の
為
に
其
方
目
下
在
東
中
の
回
信

等
の
為
に
依
り
電
報
一
交
渉

の
手
続
ハ
ラ
レ
タ
シ
本
件

明治廿九年七月九日

明治廿九年七月九日
同 起草
日發遣

主任

送第

五十四號

古内陸軍大臣

林外務大臣

清河子山台岩礦運附請求

三三三三三

外務省

清河子山台岩礦運附請求
并之在清河内台台三三三三三
月十日附送身三三三三三
會同會同知今回台台台
三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三
三三三三三三三三三三三

本館到此後再行及此照會

(宣統二年四月廿九日)

外務省

第 17 号

左ノ通り山座局長へ傳へラレタシ

煙台炭坑：開スル九日付電拜承右ハ

林公使ヨリ清國政府：對スル最後

ノ通牒：依リ尾明山外ニヶ所ハ鐵

道付属ノ山炭山トナリ有馬組其他ノ

従来ノ權利ハ終テ消滅シタルモノト着

做スベキモノナリ此局面ノ变化：由リ

右炭山ノ採掘權ハ會社：於テ之リ

有スルモノト思考ス依リ従前總裁

ヨリ申シ置キタル事ハ自然無效ト



南滿洲鐵道株式會社

ナリタル儀ト御承知願ヒタシ但會社

於テ直營セサル場合ハ従来ノ關係

ヲ加味シ會社ヨリ更ニ採掘ヲ許可

スルコトハシタシトノ總裁ノ意見ナリ

七月十日午後七時ナカニ 中村

清野理事

Handwritten signature or initials

Vertical handwritten text on the right margin



夫ノ意味ニテ西英方は所
既ニ、信託シ置キテ、
此ニ

野村

林ノ通牒ノ書素ハ表上

我権利ナルコトヲ主張シ置キ而シテ
亦會、此ノ特許有スニ支那人
亦者、テ法ヲ以テ是リ其、其若クハ
シ後ツテ存ル故、亦、通牒文ケテ、
外務省

外務省

其ノ旨、推極推テ以テ免其、
推利也者、俄スニ之、其理チ先
ハ、
ハ、
貴族可也、又自覚セズ
トナリ、支那人ノ推極ヲ
ハ、
ハ、
ハ、

奉天發 三十九年七月 十四日 后七、
本省着 十五日 前二、

大臣差 No. 2179

林外務大臣 萩原總領事

次官 第五九號

政務

通商

人事

會計

取調

警部

撫順附近ノ日本人ハ炭坑ニ従事スル者ヲ主トシ
五百余名アリ當地軍政署ハ憲兵数名ヲ派シ
軍政支署ノ名義ノ下ニ取締ヲ行ヒタルカ本月
一日以後ハ本官ノ依頼ニヨリ高憲兵ニテ引続キ
取締事務ヲ本官取次キ居レルモ永ク此儘ニ差
置キ難キニ付差當リ警部一名巡查五名派遣

此以爲西長ノ寸分ニ付ハ撫順停車場内ニ

アライモ撫順附近ノ地ト向極ニ見物
ニ係リテ警部一名巡查五名派遣
ハレトスルニ付

アリタレト尤モ撫順ハ開放地ニアラサルニ付七月
六日附山座局長宛貴電第二號ニヨリ或ハ關
東總督府ノ警察權ニ委任スル考案ナレハ其旨
御回訓ヲ乞フ

大臣 少将 小元

次官 部

政務司 生

主任 木下

立身 天

電信 業

萩原 総 幹 事 長

林外 務 大 臣

電送第 1689 號
明治 39 年 7 月 18 日 11 時 30 分 發

字 不 存 矣
三 八 号

東京 府 警 察 部 警 務 課 長 官 官 署 へ

概 々 委 任 云 々 同 部 警 務 課 長 官 官 署 へ

外 務 省

電 報 局 へ 送 信 せ ら れ ば 送 信 料 等 自 費 上 付 せ ば 可 也

此 等 之 類 係 郵 政 省 官 署 へ 送 信 せ ば 可 也

止 止 郵 政 省 官 署 へ 送 信 せ ば 可 也

大 臣 官 署 へ 送 信 せ ば 可 也

17
P1

大臣
No. 二七五

本八登
三十九年七月
廿二日
前四一〇

次官

林外務大臣

萩原総領事

第七一號

政務
通商
人事
會計
取調

煙台炭坑ハ曩ニ御電報ノ如ク我憲兵ニ於テ清國人ノ

採掘ヲ阻止セルニ其ノ後地方官ヨリ將軍ニ上申シタル

ト見ヘ將軍ハ明日日本官ニ來談スルニ先テ本日附

シ懇談セシムル所アリ其持テ來レル記録ニ依レハ談

炭坑中蘆家^ビ尾^ビ明山及^{チヨウカ}張家^カ口^ノ三ヶ所ハ昨年十

二月二十日附^鏡務總局張^{ジュカ}ノ照會ニ對シ今二十

二日附テ以テ煙台兵^兵司令官^{ツキモトリヨウ}ニ對シ

陸

リ今十二月二十五日ヨリ石炭採掘ヲ許可スル旨指令
ヲ與ヘ居レリ本官ハ明日將軍^キノ來談ニ對シテハ臨
機ノ應對ヲ為シ結局我希望ヲ達スル様ニ勸誘スル
筈ナルモ右築本司令官ノ許可狀ノ効力ニ関シ至急
其筋ニ協議セラレタシ



大臣 No.

1102283

次官

政務 通商 人事 會計 取調

林 外務大臣

第七二號

奉天發
本有署

二十九年七月二十一日

林 外務大臣

往電第七二號、英、趙將軍、奉日交訪、上
我軍兵ノ行動、要、シテ、說明、求、ナル、守、本
官、之、對、軍部ノ行動、要、シテ、奉日交訪、上
斷、各、年、之、難、ヤ、也、烟、台、之、炭、礦、ハ、東、清、鉄

偽、陸、軍、云々

17.

道會社屬約第四條、依リ、奉、滿、州、鉄、道、會
社、於、採、掘、ス、ル、等、ハ、自、清、國、官、憲、軍、隊、
甚、タ、不、規、律、ニ、採、掘、リ、開、始、ス、ル、該、會、社、ノ
權利、侵、害、ス、ル、故、ニ、帝、國、政、府、認、定、セ、サ、ル、
事、ト、シ、テ、^{（意味、リ、ス、）}將、軍、ハ、帝、國、政、府、之、意、向、
ニ、依、リ、^{（意味、リ、ス、）}於、テ、採、掘、ス、ル、事、ヲ、其、旨、声、
明、ス、ル、等、ナ、リ、殊、ニ、日、本、官、憲、軍、隊、許、可、ヲ、根、據、
ト、シ、テ、請、求、ス、ル、等、ハ、已、ニ、實、事、ヲ、果、ス、ル、採、掘、
ヲ、禁、止、ス、ル、事、ヲ、^{（意味、リ、ス、）}請、求、ス、ル、等、ハ、其、力、以、テ、停、止、セ、ル、時、
至、存、心、ノ、怒、ヲ、買、フ、將、軍、自、身、モ、人、民、ノ、面、目、

失るに於て之をト陳一たるに本旨に究むる事
 政府に其旨上申せしむるに道あり
 此際東清鉄道局約を四条に基き我が権
 利の喪失を避るに時宜しき道あり又條約
 可き旨に許可せしむる事案に於ては
 家屯に陸軍外務省に協極の一事に期限
 (例に奉天四月迄)の旨に於ては高命之に於て
 如く協極せしむる調和の計り及び案事
 令旨に許可し實に己の總督府に電向
 又將軍の意に奉るべき旨に於ては
 又道あり



二二九六
(暗)

奉天奏
本省着
廿九年七月
廿三日
廿四日
前二二二

大臣 兼 郵政大臣

次官

林外務大臣 秩原總領事

政務

通商

人事

會計

取調

18

生 第七三号
煙台炭坑ノ件
總督府ノ返電左ノ
通り

煙台兵站司令官
ハ昨年十二月、於テ炭坑附近住
民ノ燃料、窮セン様ヲ見テ總督
府ノ認可ヲ受ケス独断ヲ以テ恩
惠的、専分ノ同盧家氏外ニテ所

ノ採掘ヲ認可セリ然レハ是レ彼
ガ独断ノ基ケル潜越ノ虞置
テ總督府ノ認可ヲ經サンモノナ
ルガ故ニ全然無効ナリ

明治 年 月 日
同 月 日
日 起 草
日 發 遣

19.
人々海相
生

新大
北京

林

主任

一七六五
七二七

外務省

石原氏反り
白く下り
菅原三平
烟屋炭坑、取締り付託
松崎ノ中ノ向標ニ
沙原妻アリシ

陸軍大臣 沙波 三 正

陸軍大臣 沙波 三 正

陸軍大臣

陸軍大臣

陸軍大臣

陸軍大臣

陸軍大臣

20

秋原總領事

大源

第14号

貴電第七一乃至七三号ニ向ヒ其蘆家氏

外ニ一所ノ炭坑ハ同地ニ於テ他ノ炭坑ト

外務省

同シク戰爭中ヨリ我々於テ採掘ニ来リ

タルモノニモテ日露講和條約ニ依リ

長春以南ノ鐵道帝國政府ニ讓渡ナシ

タルヲ以テ陳清鐵道會社續約第四

條ノ規定ニ據リ茲後ニ尚我々於テ採

掘スルモノハ處右三ノ所ニ限リ本兵站司

官官ニ於テ亦分ノ南同地附近住民

其珠塘ヲ許可ニタシ由太許可ハ貴電
弟七三号御報告ノ通り正者ノ手續
ヲ經タシモノコトアリテ珠塘者ノ事情
ニ依テ察ス一キモノアリニ付甚慮家臣ヲ除
キ他ノニト所ハ与分ノ向後来ノ如ク珠
塘ヲ許スコトハス一ニ依テ貴官人太ノ主
意ニテ有件而極方面計ハん一ニ

外務省

子成二子

大臣

次官

No. 二三四三
暗

奉天茂 三十九年七月 廿七日后五、四五
本省着 廿八日前九、二〇
林外務大臣 萩原總領事

政務 通商 人事 會計 取調

第七五號

電第四號ニ関シ本官ハ本日趙將軍ニ詳細説明シ
タルニ今官ハ尾明山及張家江ニケ所ノ採掘ラ當分ノ
間引続キ許容セラレタル帝國政府ノ公平ナル措置ヲ
感謝シ又東清鐵道屬約第四條ニ基ク滿州鐵道會
社ノ權利ニ関スル本官ノ説明ヲ解得シタリ又本官ハ
又右ニケ所對魚正清國人ノ不規律ナル採掘方法
ニ放任スルハ結局清國ノ利益ニアラサルニ付滿

州鐵道會社カ事業ヲ開始シタル後ハ右清國人ノ
事業ヲ適當ノ方法ヲ以テシスル必要アル旨ヲ唱ヘ
置ケリ築本兵站司令官ノ許可書原本ヲ見ルニ第
四師團ノ公用罫紙ニ認ノ兵站司令官ノ官印ヲ押シ
アリ右寫ハ既ニ郵便ニ附シタルカ往電七三號總督
府ノ説明スル所ハ事實ニ合致セヌ
趙將軍ハ往電七二號ノ如ク本官ニ面談ノ後更ニ公文
ノ照會ヲ送リタルニ付本官ハ之ニ對シ貴電四四號
前段ノ意味ヲ敷衍シテ南滿州鐵道會社ノ權利ヲ
公然聲明シ置クヘシ御意見アラハ廿九日迄ニ電報ヲ乞

支那支隊報告

七月六日

支那支隊報告

支那支隊報告

七月十日より煙台支隊礦山採掘場へ移駐し、
 伊山ノ地區ハ糧食上當分ノ旨之ヲ許可セリ該地ニ
 ハ支隊兵大尉以下九名駐在シテ看守ノ任ス目下
 支隊兵民ノ反抗ノ模様ナリ今後モ當分ハ十カラシ
 洋一伊部一送ス

陸軍

明治三十九年七月三十一日接受

魯政務廳

手書

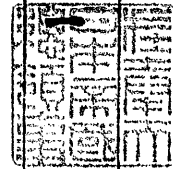
機密第六五號

烟台炭坑、憲兵出張、件、関、趙、總、督、照、會、
文、及、右、鎮、山、株、根、付、烟、名、兵、站、司、令、官、與、之、許、
可、證、寫、為、以、左、為、別、紙、及、以、送、附、矣、敬、具、

明治三十九年七月二十二日

在本天

統領事 萩原守



外務大臣子爵林董殿

1552

手書

2/A

照抄礦政調查局卷今為鄭明亮鄭文泰等在伊紅冊地名盧家却作煤東至大榆溝東嶺界西至西嶺界南至大道界北至盧家坎界原湊資本銀五千兩天利公司在尾明山作煤東至五項山界西至打魚溝界南至車道界北至張家溝界官股資本銀二萬兩王本錫等在張家溝作煤東至東崗界西至宗林寺界南至台子界北至松樹嶺山崗界原湊資本銀四千兩以上三處均已咨部立案實係清國地方歸敝局經收煤稅不敢佔俄國所買地方查俄國所買各家地界在北清國礦地在南均不相連若有差錯惟礦務局一面承管有字為証懇請貴國總督大人念及和好實給示諭免貴國隊兵阻攔俾清國華商開工做煤則感激無已矣

明治三十年十一月二十日

光緒三十年十一月二十四日

奉天運鳳安岫寬礦務總局張壽華具

一 採掘地 盧家却 採掘者 鄭明亮 日本圖書

鄭明泰

一 同 尾明山 同 天利公司

一 同 張家溝 同 王本錫

右明治三十年十一月十五日 石灰採掘ヲ許可ス

明治三十八年正月廿二日

烟台兵站司令官月本梁太郎 日本圖書

欽命鎮守盛京等處將軍

兵部尚書都察院右都御史總督奉天旗民地方軍務兼理糧餉趙為

照會事五月二十日據礦政調查局呈稱據遼陽州尾

明山天利公司總董熊壽鏡稟稱五月二十五日有日

本陸軍憲兵曹長富重國太郎二人到密間談約

到摩箕山一語適被雨阻二十八日突據大榆溝司事

飛報本日忽有日本憲兵八名至大榆溝大密張家

溝等處告稱即時停工限三天將房屋煤堆一概騰

出交日本辦理等語總董隨即馳赴摩等箕山瞻日

本憲兵大尉笠鶴章由日本繙譯大野正家傳述奉

旅順總督命將大榆溝大密張家溝茨兒山樊神堡缸

窰村等處由摩箕山起至尾明山交界止其中山之

南北全歸日本辦理僅留尾明山煤窰一處應會同勘明

四至刻難容緩等語廣告以勘界之事未有公文非總董

所能擅辦須由總局呈請將軍核斷行下遵辦該憲

兵大尉始云以五日為限理合稟請示遵等因據此職局

查遼陽州屬之尾明山係官作之密大榆溝張家溝係

官督商作之密其茨兒山因溝村等或領票未做或

甫經請領均與交涉無干此次日本憲兵未持公文突如

其來催令勘界並將礦產讓出云係旅順長官之命究

否屬實係何緣故理合呈請示遵到本軍督部堂

據此覆查無異相應照會貴領事請即查明所報勘
界憲兵是否大島男爵所派因何而起是何緣故均希
查明飭禁見覆施行須至照會者
右照會

大日本總領事萩原

光緒三十二年六月初二日

山口等ノ所ノ地方ヲ侵佔スル者ニ對シテ
 實ノ所ノ各宗地界ニ北ニ在リテ其ノ
 南ニ在リテ均ク相連ラズ若シ其錯ア
 不廢移局ニ於テ引續クテ其ノ
 貴馬佐督大人。執好リ念テ其示論ヲ
 給セシキ貴馬隊兵、阻攔リ免シ其
 高クシテ此工採石セシメテ其ノ
 三ト毎シムル

外務省

明治三十年十二月二十日

光緒三十年十一月二十日

奉天遼鳳安岫寬礮務局張壽華具

一 採石地 盧家村 採石者 鄭明亮(中)

鄭明泰

一同 尾岫山 同 天利公司

一同 張家溝 同 王本錫

右明治三十年三月十五日
石炭採掘
ノ許可ス

明治三十年三月廿二日

烟台兵站司令官月平 梁右郎 (印)

外務省

明治 年 月 日
同 年 月 日
起草
發遣

主任

北系紀略

趙將軍

以步騎攻... 趙將軍

外務省

遼陽州尾山天利... 長富重國... 磨管山... 阻... 大橋... 事... 二十...

ノ監智ノ下ニ高人橋樑ノ坑ナリ又サ次
児山岡澤村寺ニ或ハ免状ヲ乞フ所ニ未
タ其橋を破ル或ハ出願中ノモリシテ地
ノ其立海ト異像ナリ今同日本官軍兵
カ公文ヲ有テ定付来リテ界ノ踏査
ノ儀ハ~~申~~申^並破査^申引渡シ候カス
果シテ橋樑ナリ命ナリヤ如何ニ理由
ニ係ルヤ或ハ捨令ニ成ル所ナリ

外務省

大ニ以テ^ニ本軍務^ニ事^ニ關^ステ^ハ調査^スル^ニ所^ナリ
速ニテ^ハ云^フニ^テ是^レ何^レノ^事ニ^テハ^ハ何^レノ^事
有^ル所^ナリ^テ調査^スル^ニ所^ナリ^ト境^界調査^ノ事^ニ
兵ニ果シテ大島男爵ノ心算スル所ナリヤ
如何ニ理由ニ依ル此ノ事件ヲ起セシヤ
查明禁止セシテ^ハ何^レノ^事ニ^テハ^ハ何^レノ^事
扱^スル^ニ所^ナリ^ト其^レ何^レノ^事ニ^テハ^ハ何^レノ^事

支那三十二年六月二日附
第七
世田

15/19

明治三十九年八月六日接受

管政務局

株券七二〇

烟臺地方炭坑処分ニ関スル件

烟臺炭坑、一部盧家屯及張家溝、於テ清國人、株堀セル炭坑ヲ我軍兵隊、手ヲ以テ占領シタル件、關テハ、法電訓、依リテ盧家屯ヲ除ク外張家溝及尾明山、ニテ、當今、内其係、清國人、株堀ヲ許スルト、相成其旨得軍へ回答致置キ処元來該地方、於テ清國人、開堀セル炭坑、何レモ其規模極小ナルモノニテ、尾明山、官金ニ万兩、資本ヲ以テ天利公司、株堀セル、係リ盧家屯、官金ヲ萬兩、集セル株金五千兩張家溝、公ニテ四千兩、資本ヲ放シ下セル、過キヌ之ヲ合計スルモ、僅ニ三万餘兩ニテ、比較的少額ナルヲ以テ、將來愈南滿洲鐵道會社附屬トシテ該炭坑ヲ經營スル、曉ニ至ラハ上記、三個処其他實際清國人、權利、屬スル炭坑ニテ、無償占領、權々、若キ情事キモノ、對シテハ、其資本額ト實際、設備經營トシテ、的ニテ相當、價ヲ定メ之、對シテ鐵道會社若クハ炭坑會社、株券ヲ交付シ以テ名義上之ヲ買ヒ上カタル形可ク存シ一面此等地方、關係者ヲ以テ直接、存奉

管
政
務
局
印
七九

業、永の利害關係ヲ保ツルコトハ寧ろ、偉大の資金
ヲ借シ強ラ之ヲ在領シ以テ深ク地方民ノ怨恨ヲ買フ
比レ事業經營上却テ得策ナルベシト思考致
至尚撫順炭坑等：對シテモ可成此方策ヲ取ルコト得
策ト存案

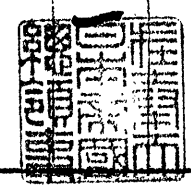
尚又該炭坑採掘ヨリ生ズル粉炭ノ内其數分ハ該地
方民ノ燃料ニ供スルコトニ以テ該地方民ヲシテ該炭
坑採掘ノ為メ多ク、餘澤ヲ被ラレシメ而シテ右粉炭ノ
販賣ハ特ニ之ヲ從來ノ採掘者ニ許可シ以テ特別
ノ利益ヲ享受セシメ凡テ成ルベク地方民及從來ノ
關係者ヲシテ該炭坑ト密接ノ利害關係ヲ保ツルハ
方針ヲ取ルコト據系ノ經營上頗ル策ノ得タルモト思料
致矣

右和見及関係ニ 敬具

明治三十二年七月廿八日

在奉天

總領事 萩原 守



外務大臣子爵時林 董 殿

明治三十九年八月六日接電

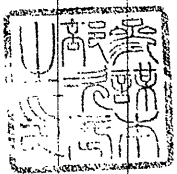
管 政務司

參通第一九三號

明治三十九年八月四日

參謀本部次長 福 島 安 正

外務次官 岡田 棧 三 郎



烟台炭坑採掘禁止、付付落台各港
長ヨリ列紙ノ通知有之候間及通知
修也

陸 軍

1570

各取分一五五之三

八月十日 陸軍部 政務司

参謀本部次長

及信者 岩倉 友 吉

烟台炭坑採掘禁止ノ件付前遼陽知州「カコウキ」
ハ在天津將軍ノ命ヲ受テ陸軍ノ所ノ不日取締存
ニ来ルニ言臨督、之ニ対スル採掘ハ烟台炭坑採掘
禁止ニ関シ、又要ニ基リモノニシテ所有権問題
ニ関係ナシ若シ支那友軍ニシテ其所有権ノ
確認ヲ得ントセハ公法ヲ確テ申述シタルト
ノ意ヲ以テセントス為念

(同文)

大 本 營

明治三十九年八月六日接受

參謀本部第一九四號

明治三十九年八月四日

參謀本部次長 福島安正

各務官 藤田 隆巳 形

烟台岩坑採掘禁止ノ件ニ関シ、吳東總督府ヨリ長濱寺ヨリお成ノ旨ヲ報知スルニ付、

寫
奉
送
付
候
旨

陸軍

158/

參謀第一五五三號 八月三日受領 參謀第八七一號

明治三十九年七月二十六日

關東總督府參謀長 落合 豊三郎
參謀本部次長 福島 安正 殿

七月九日ヨリ烟台各炭坑ノ採掘ヲ禁止セリ笠大尉ノ報告書相添御參考迄及送付

追テ同地炭坑採掘期ニ先々テ邦人ヲシテ採掘ニ從事セシメ集來スル坑夫等ヲシテ失職セシメルニ必要ト相考ヘ共此件ニ就テ八月十三日陸軍次官へ電報シ置ケリ

陸軍

関憲警第七九号ノ五

烟台炭坑ノ件ニ付報告第三

明治三十九年七月二十日

関東憲兵隊長

関東總督府参謀長宛

烟台炭坑ノ取遣ノ旨憲兵大尉ヨリ別紙ノ報告
到着ニ付更ニ及報告候也

陸

軍

關憲警受第七九號第四

烟台炭坑株炭業禁止付状況報告

明治三十九年七月二十二日

一、烟台炭坑ノ状態

烟台各炭坑坑主トシテハ奉天將軍ノ差遣セル天利公司尤尾明山ノ支那政府官業ヲ除ク外、鑄子溝、大窪、茨見山、田家溝、老虎峯等ノ坑主ハ里ニ遼陽城内外ノモリクシテ、該地土着ノモノナク又其坑夫モ山東省及海關管内炭山地方ノ出稼人ニシテ而シテ彼等坑夫ハ株炭期即チ九月ヨリ三月迄出稼ヲセシ兩期即チ四月ヨリ八月ノ期間ハ各自故郷ニ歸ル例トシ本年アリテモ目下坑夫等ハ大概飯省中ニシテ僅少ノ残留者アルニシテ其人負(残留)別左ノ如シ

陸軍

一、大狗溝(天利公司使役坑夫ニ坑ノ分)約百六十名

一、鑄子溝(奉天錦使役坑夫 五坑ノ分)約百〇七名

一、茨家屯(孫子庚使役坑夫 一坑ノ分)約百拾五名

一、其他老虎峯、大窪等ノ坑ノ廢坑ニナリテ程度ニ於テ掛水其他ノ仕事ニ従事スルモノ 約百名

右ノ烟台炭坑ヲ通シテ残留坑夫ノ總人負ナリトス

二、烟台ノ坑ヲ最モ有力ナル炭坑業者ハ前記官業ノ天利公司アルニシテ該公司ノ株炭時期ニ至リ尾明山(目下多量ノ水ニテ株炭スルヲ得ス又磨礮山ヨリ見ルハ最モ代地)ノ開墾スレハ優ニ千余名ノ坑夫ヲ使役スントキテ該公司主任熊舟竹録同次席戸福海ヲ百餘ノ尾明山ヲ除クノ外全然株炭業禁止ノ命令ヲ達セシメ彼等ハ目下大狗溝ニ使役スル坑夫百六十名ハ同竹ノ株炭ヲ禁止

セシ各ハ勢ヒ尾明山使役ニシテ講セザルハ故ニ通出
ノ管処(尾明山)ヲ採掘スルカ又ハ他ノ方法ヲ執ルカ既レシテモ
談坑夫ハ使役スベシト云ヒ彼等ハ該命令ニハ心長ク遂ニ
セリ斷リ尾明山ノ採掘ヲ認可セシ結果他ノ採坑ニテ徒食
セザルヲ得ザル殊留坑夫約三百有餘名ハ向後尾明山採
掘者天利公司ニ交渉シ妥懐ヲ遂ケテ其殊留坑夫ヲ天
利公司ニ使役セシメ彼等坑夫ヲ生業ニ就カシメ得ルコト敢
テ難キコトヲ示サレハ信ニ
然レ彼等殊留坑夫ノ意向ヲ搜知スルニ彼等ノヨリハ
撫順ニ志スル如シ天利公司ハ採炭期ニ至ラハ約千名ノ
坑夫ヲ要スルコトナレバ目下同公司ニ使役スル者百六十名ノ
殊留坑夫約三百有餘名トテ令シテモ尚五百有餘名ノ出稼
坑夫ヲ要スルコトナリト云

三 当烟台ハ是迄倒年採炭期ニ及ハハ約六千名余ノ坑夫來烟シ
居リタリト故ニ今回之ヲ禁止スルコトナリヤセハ本年モ亦此等ノヨリ
數ノ坑夫ヲ免ルニ至リヤシ然レ目下兩期中ニ各坑其採炭期
止メ今日之ヲ禁止セシハ實ニ好時期ニシテ遂ニ般禁止ノ結果
坑夫又抗云々ノ事ハ目下ノ水態ニ在テハ夢ニタズナキ
コトナリト云

四 烟台附近匪賊ノ状況

該地方ハ前述ノ如ク出稼人及徒テ普通竊盜セザルハ
免レザル地ナリト云
匪賊トシテハ昨春首魁張德盛斬殺セリ其後一時
掠奪ヲ逞クシ居リ今韓樂山ナル者部下約五十余
名ヲ有シ衛細シ居リ是又去ル五月下旬奎陽督
西京馬隊ニ逮捕斬殺セリ今其結果其部下四散

之目下該地方に於て馬賊ヲシキキテナシト
又該地方に左ノ團練編成アリテ自衛ノ道ヲ講ヒテハ甚感
ナキ様認テ

鵜眉庄

沙灣処

黃堡

標河

東山堡

各馬隊六十名ツノ有ニ

右ノ如ク合計參百名ノ馬隊ト殊ニ遼陽州ヨリ常流ノ炭坑
庄備巡警隊(大窪ニ駐也)五十名トアリテ敬言戒勤務ニ服シ
居レリ從テ彼等ト連絡シ自軍警戒セハ慮ルルニキナリ
目下奉天將軍ノ該地ニ着目シ居ルハ事實ナリト本年清
曆四月下旬張家溝李家屯大狗溝ヲ官業ニ支旨告

陸軍

示(告不ノ実物ヲ得テテ務メカカリ)シタリト云フ尙近頃天利
公司能總弁サレテ五頂山(崑崙山トアリ)東方ノ清軍
(展明山ヨリ東南ニ十里)十九紅窪ニ炭坑發見官業
トサント云フ紅窪ハ本年四月頃清人隨某試堀セル由
ト云テ許可ノ証キ故差シ止メテタリト云フ
紅窪ハ吾力禁止区域ヲ展明山ナリトスルハ其区域外ナリト思
料ス
以上

十九年八月六日接受

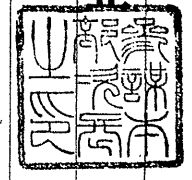
警政務局

参謀本部 参通第一九五號

明治三十九年八月六日

参謀本部次長 福島 安正

参謀本部 参通第一九五號



煙台炭坑禁止ノ件ニ付 吳東總督府及
青島 通商口岸 及 通商
口岸 及 通商口岸 及 通商口岸
打切

機密 参通第一九五號

参謀本部 参通第一九五號
青島 通商口岸 及 通商口岸
青島 通商口岸 及 通商口岸

陸軍

参通第一九五號

17

決意

八月

廿

日

陸軍省

文書

第...

昨三〇「カコウキ」来リ、烟台炭坑採掘禁止、
 爲し種々ナル事情、陳一物ある、思曲ヲ以テ採
 掘ニ係ル、此は清國民ノ爲難、免レシコトヲ
 請ハリ、然レモ此等ノ件ハ、總督府ニ於テ決一の
 したるガレ、以テ之ニ依リテ、後ニ後、我政府ニ
 交渉スベキ事、多ク其テテ、決レテ、ラレタリ

陸

軍

支那郵便

本署課

明治三十九年八月六日接受

明治三十九年八月六日 發遣

明治三十九年八月六日發遣

主任

林有彦

寺内閣軍左官

林有彦

烟台炭坑ノ件

外務省

烟台炭坑ノ件ニ関シテ向者尾崎山一團

屬シ除キ也 華ノ坑区ニ悉皆本邦

ニ於テ探掘所存ニ及ル其後月本

兵站司令官ニテ在リテ探掘ノ許可ヲ取ル

事ニ及ラズ見セラレタルコトヲ

其間ニ在リテ探掘ノ許可ヲ取ル

中常ニ在リテ探掘ノ許可ヲ取ル

亦能乞之於他國之文、教
分、官、川、實、中、法、也、人、採、性、
ハ、洋、ノ、事、ニ、趣、有、リ、以、テ、其、
為、事、ノ、交、涉、也、之、以、交、渉、
於、之、モ、之、リ、條、之、特、方、ノ、措、置、
ニ、對、シ、裁、衡、ノ、長、ク、日、信、領、
事、ノ、宣、傳、及、其、趣、意、
一、其、後、又、以、心、之、其、條、條、之、
其、中、各、事、ノ、如、此、ノ、如、此、
者、一、歎、末、之、事、亦、信、情、
存、ハ、事、務、ノ、親、善、友、友、也、
其、指、導、之、事、亦、各、各、其、事、也、

外務省

明治 年 月 日
起草
日發遣
万代虎

主任

新島小太郎 七月廿二日

七十一号

日 二十一日

七十一号

日 二十一日

外務省

新島小太郎 七月廿二日

七十一号

新島小太郎 七月廿二日

七十一号

(右写生係付)

明治三十九年八月七日接受

陸軍省 密 送 密 送 第二四五 號

佐末

明治三十九年八月七日

陸軍次官 石本新六

外務次官 孫田桂巳殿

機密 受第1590号

機密送付一九〇九年八月七日
精成、福部、方、依、新、お、中、の、烟、臺、炭、坑、玩、件
ハ、申、渡、し、通、計、官、の、旨、を、承、知、お、成、度
追、つ、自、今、如、斯、事、柄、ハ、時、期、ヲ、失、セ、サ、ン、為、メ、領、事、司
リ、直、ニ、経、緯、府、ニ、通、報、ス、ル、コ、ト、を、要、ト、存、テ、申、添、付

陸軍省

文書課長

明治三十九年八月七日發

明治 同 八月 廿二 日 起 廿 日 發 滿

明治三十九年八月七日發

敬請 閣下

了 閣下 學

機密送第

奉天

龍口

大少

烟台在坑

外務省

烟台在坑探煤禁止件
案之ル案東總督府案深長
物者案深知了是台者計
印天多所止大少子計子計
也
夫通亦一九四号の御
手紙

栄光

30.

機密第1619號

明治三十九年八月十三日接受

機密第 七六號

書寫送附

止

Handwritten mark

解回

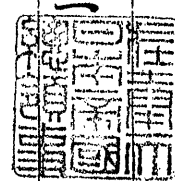
烟名法坑古領、園し得軍、回春
書寫送附、件。

烟名法坑、内尾明山ヲ除ク、外一今園我守忠兵、
手、於之ヲ古領シ、件、園シ得軍、照會、
討シ貴電介四四等ヲ以テ訓令、以主上日、甚々
別紙寫シ通リ、及回春置美同、以貴園相成度、
敬具

明治三十九年八月三日

在奉天

統領 奉天 秋原 守一



外務大臣子爵 林 董 殿

明治三十九年七月二十九日附

機密第七二號附片

奉天總督趙爾巽呈文寫

以奉天致敵復獲之陽者貴之緒光緒三十二年六月初二日
 附及初七日附貴照會ヲ以テ烟臺崖坑ニ関シ日本憲兵
 大島總督ノ命ト稱シ尾明山崖坑ヲ除ク外凡ソ其
 孫嶺ヲ傳ヒ日本ニ引渡スベキヲ命シ強ク立會ヲホシ
 テ尾明山崖坑ノ区域ヲ劃定シ其他ノ崖坑ニ凡ソ憲
 兵ニ於テ之ヲ占領シタル旨天利公司ヲ報去ニ據ルルハ
 本憲兵ノ果シテ大島總督ヲ引渡シタルモノナリヤ又前
 以テ何等ノ照會ナリテ突然之ヲ占領セラレタルハ不
 理ト存スニ付連ニ取調ト右占領ヲ取消カレタレバ
 本示ニ依リテ其志本總領事ニ副直ニ帝國政
 府ニ密報シテ其回割ヲ得スニ付左ノ及回答ス
 抑モ烟臺崖坑ノ全部ニ對露戰役中帝國軍隊
 ノ手ニ於テ軍事必要上孫嶺ニ來ルルモノニテ帝國軍
 隊撤退期間中ニ其地ニ孫嶺ヲ許容ス可キ理由無之
 加之日露講和條約ニ依リ長春以南ノ鐵道帝國政府
 ニ讓渡カレタルヲ以テ該崖坑ノ東清鐵道會社ニ讓渡
 四條ノ規定ニ依リ近ク南滿洲鐵道會社ニ於テ孫嶺スル

答、有之貴國政府、北京條約、依り、右日露溝和条
約、基り帝國政府、權利ヲ以承認、抑或、付烟臺
炭坑、獨ニ南滿州鐵通會社、權利ヲ以否認、可
相成理由、之無之モノト存ス

前條、理由、依り、法系示、尾明山及張家溝、二處ト是凡
貴國官民專營、採掘ヲ許容、可、此等、無之、其得
共ニ系議、依り、各年十二月貴奉天遼鳳安岫寬
礦務總局張氏、情請、依り、我烟臺兵站司令官、
於、一時權宜、許可、ヲ與ヘル、基り、貴國官民、於
、僅類、資本、釀出、ノ規模、採掘、ノ開始、ノ存ス

趣、付帝國政府、於、右、事情、酌量、ノ尾明山及
張家溝、二處、他日南滿州鐵通會社、於、採掘、必要
ヲ認、此、邊、間、引續、採掘、ノ許容、ノ事、注定、致、付
右、様、以、承、相、成、度、其、尤、右、處、ノ、處、ト、是、凡、貴國、内
普通、行、ハ、ル、不、規、律、ノ、採、掘、方、法、以、放、任、相、成、ス、以、
必、竟、貴國、利、益、無、之、付、近、ノ、適、當、方、法、以、
右、等、私、營、採、掘、業、ヲ、以、撤、止、相、成、之、様、以、考、量、相、成、
是、亦、併、リ、及、以、注、意、ス

右及照復、敬具

明治三十九年七月廿九日

此、其、方
レ、リ、到、令
ノ、以、
カ、
カ、

明治二十九年八月十四日發送
同 明治二十九年八月十四日發送

明治二十九年八月十一日接獲

生 主任

内閣

在清 林 大臣
林 大臣

煙台各坑之官件

外務省

威高者煙台各坑、中込來個人之
採掘ヲ許シタルモノハ坑区アリ其内
五坑区ニ於テ採掘者ニ多ク其ノ
買収シ他ノ坑区ニ當リテハ
採掘者一ノ年採掘回所ニ
領シテ其ノ採掘者ニ於テ採
掘者ニ採掘ノ復ノ後、之ヲ採

堀多中止し居りしに先般山登路移局
 長浦海出港中一六三坑又々率
 天將軍に於て古蹟を以て計畫
 ありし間込に其内盧家等ありぬきい煙台
 岩坑中一畧之有るを以て之を以て
 徑中一畧之有るを以て之を以て
 主トシテ曰所すし由府法馬地方友
 外務省
 が未多室御着手セザルに先子種古
 備兵着干ヲ沁シテ右三坑^区の内取モ
 價値ナキ尾の山ヲ除キ他ノ二ヶ所即チ
 盧家モ及法家澤ヲ占有し進テ東
 法鑛道存社持約ヲ守條に依
 り鑛ヲ我鑛道存社ニ於テ經營
 スルモノナルヲ法馬政府ニ呈請スル方

可也多蒙祇汝亦其自亦时在京
 中ノ大崎路替リ招議ヲ遂ケ官軍
 シシキニシテ之使シ結局ハ一連ビニテ
 然レニシテ官軍モ及ル家業ノ
 年集返有今東ノ法也人ニ
 堀長清也
 堀ヲ禁止スル、時ハ主人ノ難解不具
 一ノ部持軍目ノ蘇尔路也人ニ交
 之来、心儀ナリ、調子起、本日本集
 証有今東ノ法也、事案ニテ、若
 増、行、別、電、牙、一、号、通、了、蘇、尔、路、領
 子、一、証、電、及、主、其、知、同、牙、二、号、
 通、了、同、証、領、了、一、号、電、通、了、一、

外務省
 堀長清也
 堀ヲ禁止スル、時ハ主人ノ難解不具
 一ノ部持軍目ノ蘇尔路也人ニ交
 之来、心儀ナリ、調子起、本日本集
 証有今東ノ法也、事案ニテ、若
 増、行、別、電、牙、一、号、通、了、蘇、尔、路、領
 子、一、証、電、及、主、其、知、同、牙、二、号、
 通、了、同、証、領、了、一、号、電、通、了、一、

別
第四号

新島信修ノ死電付 七月廿五日

支電第七万七千七百三十三号ニテ屬家外ニテ所ノ

炭坑白地ニ於テ他ノ炭坑ト同シク競争中ニテ我ニ

於テ採掘シ来ラタレモニシテ日露協和條約ニ依リ

長春以南ノ鉄道ヲ吾政府ニ讓渡セラレタルコト

東法鐵道會社條約第四條ノ規定ニ依リ今後モ

外務省

尚我ニ於テ採掘スル者ハ屬家外ニテ所ノ日本兵站司

令及ニ於テ當分ノ官地附近ニ於テ其採掘ヲ許

スルハ由右許リハ支電第七千七百三十三号ノ報告ノ通リ

屬家外ニテ採掘スル者ノ事概シ

テ屬家外ニテ採掘スル者ノ事概シ

分官地ニテ採掘ヲ許スコトス(シテ依リ屬家外ニテ

之旨ニテ本件ヲ採掘スル計ハル)

撫昭 4521

機密送奉 七八 號

昭和三年九月二十日

陸田 治 啓

寺也南博 鐵道局社設 立事長長宛

備沙 終之 處 鑛 調査 之 案 之

在 在 之 處 中 一 件

場 沙 終 之 處 鑛 調査 之 案 之

別 紙 之 通 在 在 之 處 中 一 件

外 務 省

了 具 申 一 件 之 通 在 在 之 處 中 一 件

最 之 供 望 之 候 也

(別 紙 一 頁 三 〇 號 字 添 了)

皇通第二〇〇号

明治三十九年八月廿七日

参内信託長田芳青君 御呈

体中 古也 幸由 之 敬 取

白く各官事務に必要なる諸君を提理、調査書に就て
一通り調査結果を御呈送長君報告書に
召及通報也

明治三十九年八月廿七日

信託長田芳青君 御呈

皇通第二〇〇号 敬 取

皇通第二〇〇号 第五号 之 敬 取
山台事務所 御呈 諸君を提理、調査書に就て

信託長田芳青君 御呈
一通り調査結果を御呈送長君報告書に
召及通報也

皇通第二〇〇号

明治三十九年八月廿七日

参内信託長田芳青君 御呈

体中 古也 幸由 之 敬 取

白く各官事務に必要なる諸君を提理、調査書に就て
一通り調査結果を御呈送長君報告書に
召及通報也

之見如く、諸君、而、明治二十七年四月頃、
際、
其、
即、
亦、
之、
也、
り、

皇極第二九の号第七

明治二十九年七月二十日

皇極第二九の号第七

陸軍大臣 寺内正毅殿
少佐 佐藤 義典
少佐 佐藤 義典
少佐 佐藤 義典
少佐 佐藤 義典

皇極第二九の号第六

皇極第二九の号第六

明治二十九年七月二十日

皇極第二九の号第六

皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六
皇極第二九の号第六

奉政報告第二百二十五號

明治三十九年六月九日

奉天軍政官代理池田巳吉男

關東總督府參謀長落合豊三郎殿

叅護第六六七號ヲ以テ御申越相成タル盛京省千山名ニシテ千金塞ハ其山ノ東麓國官衙ニ就キ取調ヘタルニ千山台ハ山名ニシテ千金塞ハ其山ノ東麓ニ在ル村落ナリ該官衙ニ函面ナク隨テ函解ヲ附スルヲ得サルモ千山台ハ即チ千金塞ナルニ付更ニ函解ヲ要セサルニ似タリ該官衙ノ答解ノ譯文ハ左ノ如シ

查スニ千山台ノ東坂下ニ千金塞河溝一條アリ其東ニ南北ニ通ル一條ノ干溝アリ尚東ニハ楊柏堡河アリ楊柏堡ハ東北ニ位置シテ西南群山ノ環繞セルニ面ス此外一條小河アリ正南ナル唐雨屯ニ源ヲ發シ本堡ニ至リテ西北ニ奔流シ堡ヨリニ清里計ニシテ復一直北流シテ渾河ノ大流ニ合ス河ノ長サ三十餘清里幅三四丈ニテ小干溝ノ如キモノニ非ラズ是ヨリ西スルト一清里餘ニシテ千金塞アリ山勢平鋪ニシテ一條ノ河溝ハ秋家樓子ヨリ起リ千山台ノ東坂ヨリ流下セル山水此徑ニ相會シ溢溢横流ス平時ハ散漫乾涸シ河ト稱スルニ足ラザルモ若シ雨水盛ニ至ル時ハ或ハ奔流シテ渾河ニ入ルコトアリ土人ハ之ヲ呼ビ千金塞河トス本河溝ハ一直ニ塞中ニ入ルヲ以テ千金塞村ヲ溝東溝西ニ區分ス

撫順炭礦採掘權ニ関スル調査
所謂撫順炭坑ナルモノハ其炭坑所主地ニヨリ之ヲ大別シテ河北
河南トシテ渾河ヲ以テ境トス河南ハ復タ之ヲ別チ楊柏堡河
(渾河ノ支流)ヲ以テ河東河西トス其境内ニテ各地名ヲ挙テ
左ノ如シ

河南

河西。李石寨、大瓢屯、小瓢屯、古城子、千金寨、

河東。楊柏堡、老席台、邁達屋、

河北

白龍山、土口子、石門寨、馱馬站、營盤、新屯、嶺

其開掘權ヲ有スル者ヲ記セハ左ノ如シ

河南

河西。李石寨ヲ除ク外大瓢屯、古城子、千金寨ハ華興

利公司ニ屬ス

河東。楊柏堡、老席台、邁達屋ハ露商撫順公司ニ屬ス

河北

白龍山、土手、石門寨、馱馬站、營盤、新屯、嶺ハ何レ

モ溥裕公司ニ屬ス

華興利公司

一 礦區

東ハ楊柏堡河西ハ大瓢屯ニ至ル十清里南ハ塔裕山ヨリ北ハ渾河ノ岸

ニ至ル六乃至七清里ノ間トス即チ千金寨古城子大瓢屯ヲ含ム

トス

二 沿革

(1) 開掘許可 光緒二十七年五月清國紳商等、創辦在所ニテ
候選經歷王承克願、主ナリ開掘ヲ清願セントシ榮倫、英
凱等ト共同シ資本金四万兩ヲ合資シ内一万兩ヲ以テ報効銀
トシ其旨ヲ増補將軍ニ出願セリ(甲号願書左看)

候選知縣翁壽モ亦同時ニ開掘ヲ出願シタル將軍ハ同治劉朝
鈞知縣祥徳ヲ委員トシ王翁等ト共ニ同處ニ到リ楊柏堡河
ヲ以テ境界トシ東ヲ公前ニ西ヲ王ニ歸シ八月七日ニ試掘ヲ許可セリ
(乙号許可書)是ニ於テ王ニ更ニ試掘届(丙号)ヲ出シ八月十七日試
掘ヲ開始セリ委員劉朝鈞祥徳歸來共實地踏査シ續
テ復命シタルハ八月二十日ニ増補將軍ハ王翁等ノ開掘願書ニ
對シ皇太后皇上ニ上奏裁可ヲ請ヘリ(丁号奏文)
此上奏ニ對シ十月三日 兩陛下裁可ヲ得タルヲ以テ増補將軍
ハ同月二十九日付ヲ以テ王等ニ對シ開掘許可書(戊號)ヲ下付

セリ即チ王翁等ハ二十七年十月二十九日ニ至リ、全ク其開掘ノ權
ヲ得タルモノナリ

(2) 訴訟 光緒二十七年八月末翁壽ハ王承克カ岩坑ノ好良
ナク見遠ニ王カ所有ノ蘆沿坑(千金寮屬)ノ二坑ヲ以
テ領採堀シ居リシヲ以テ王ハ之ニ中止スベキヲ請求セシメ彼レニ
ヲ聞カサルノミナラス李聘ニラ介シテ紀鳳台及蘇、御用
商ルーヒンロフ(露商陸家洛夫)ト結托援引シ醜トシテ
介意セズ以テ於テ王ハ將軍ニ告發セリ紀鳳台モ亦其坑ハ岩
ノミナル旨ヲ辨明若ク出セリ將軍ハ之レヲ交渉局ニ交付シテ
辦理セシム徐總辦ハ王ニ其ニ坑ヲ讓與センコトヲ勸告セシメ王
ハ固ク已レノ權利ヲ主張シタルニ依リ、己ムナク十二月初ニ至リ増
補將軍ハ增補ヲ委員トシテ該地ニ派遣シ旧ノ如ク楊柏堡
河ヲ以テ分界トシ蘆沿坑ノ二坑ハ河西ナル之ヲ王ニ歸シ同

月二十日に至り全了結了スルニ至リ

(3) 露清銀行加入 右記ノ許証ハ結了セシト雖モ河東ハ常ニ露人ノ後援ト李聘三ノ援引アルヲ以テ將來ノ紛議ヲ恐レ徐徐辦及道勝銀行買辦 吳介臣ノ勸告周旋ニ由リ光緒二十八年三月該銀行ヲ加入スルコトナレリ此ニ於テ其旨ヲ將軍具申シ許可ヲ得タレハ更ニ定款ヲ定メ名義ハ開辦當時ヲ使入額及拂込額ハ十方兩ニ達シ居リ更ニ該銀行ノ申込額ハ六方兩ナリシカ之ヲ許シタリ然レモ其實ハ老万七千五百兩ヲ以テ分チテ払込ミタルニシテリ

(4) 開掘着手 前述ノ如ク光緒二十七年八月廿七日試掘セシ九月二十日迄リ初メ右岸ヲ得タリ然レモ當時許可書ヲ得カルト一方ノ許証ノ起リシ

ト因リ休止シ茲其翌二十六年正月七日に至リ再ニ開掘ニ着手セリ此レヨリ二十九年ハ無事ニ経過セリ逾エテ三十年四月に至リ露人カトリストフ(噫禮特拉司多夫) (アムントフ) (関多夫) 等該公司ト何等ノ商議ヲナシ該公司界内ニ鉄道ヲ敷設シタルハ王承堯四月十九日奉天ヨリ千金寨ニ赴キ其實情ヲ踏査スルニ該鉄道ハ蘇家屯ノ北ニ於テ本線ニ岐シ東行スルノ支線ニシテ當時ハ李石塞迄敷設ヲ終レリ近キ將來ニ於テ揚拍保土老席台一帶ノ地方ニ及ツヘシ當時復兵四十餘名ハ千金寨ニ駐屯シ居リ然レモ石炭ハ旧ニ仍リテ猶ホ採掘シ地面安靜ナリヤニハ自歸東レ直ニ其情況ヲ將軍ニ上申セリ(已辨) 屆去者老看) 而シテ岳端靖カララシテ以テ爾來將軍ニ具申シテ休業セリ然レモ奉天商民冬期燃料ノ欠乏ヲ補ハシ爲メ復々十月十日另坑夫ヲ招募シ旧ニ仍リテ採掘セシレ露人ノ妨害ヲ恐レ

女保護ヲ願ホタリ(庚子願書冬看)逾三十二年正月十二日三
露人「カリトラスト」四有餘名ノ露人ヲ率ヒ五坑ノ内三坑ヲ占領
シ之ヲ採掘シ外ニ露人三百名アリテ石炭ヲ汽車ニ搭載シ
運搬シ迄事セリ其他ノ二坑ハ猶華興利公司ノ坑夫等カ旧
仍リ開採スル任ス然レモ其採炭ヲ售賣スルヲ許サズ此ニ於テ
王將軍ニ告旨ヲ届出シタルヲ將軍モ亦如何トモス能ハサリキ
(辛卯冬看)二月五日我カ軍奉天ニ入り六月ノ曉諭ヲ
見テ千金寨ハ自公ノ開掘権内ニ在ルコトノ証明ヲ將軍ニ願
出ソリ(壬子願書冬看)然レモ其然公司石炭販賣所販
賣權等ハ今尚ホ王承堯保護ノ下ニ在リ

(イ)馬龍潭ノ廣濟公司ト華興公司 光緒三十年十月馬龍
潭邢鳴謙程文斌丁福裕四名ノ出願ニテ營務處總辦
夏宏觀ニ轉達ヲ依頼シ大瓢氏即東ハ古城子界ヨリ

西ハ大演武溝南ハ小演武溝南嶺ヨリ北潭河迄ノ間ニアル炭
礦ヲ開カレトテ願ヘリ而シテ又十月十日交渉局總辦宛ニテ
右運石ノ開掘ヲ願出シ炭資本ハ二十五吊(約二万兩)ニテ其酒
局ノ供給ヲ專ラトスル者ヲ以テセリ然レモ王承堯ハ之ヲ開知將
軍ニ向テ自己即華興利公司属ノ地面ヲ示シ又礦運
自己ノ者ナルモ報明シタル終ニ馬龍潭等許可ヲ得ルに至
ラス此事ノ関シテハ馬及王ノ云フ所ニ歸スルヲ以テ信ス可キ
也

三定款

本公司前奉天省撫順界内千山台即今楊柏堡河西一帶(千山
台即今千金寨ノ炭坑ア山ノ稱アリ)ノ炭礦ハ礦甚ク佳ニシテ屬甚
ク厚キヲ以テ之ヲ開掘セシテ願出シ信セテ報効銀一万兩ヲ
貢獻シ國家ノ經費充テコトヲ請ヘリ奉天將軍増祺ハ其願

趣旨を差支奏請し光緒二十七年十月二十四日ヲ以テ批准裁可ヲ蒙リ此ヲ將軍ノ訓命ニ依リ開坑ニ着手スルコトナリ先後清國人ノ株金ヲ集メテ奉天銀拾万兩ヲ得タリ爾後道勝銀行ノ株金奉天銀六万兩ヲ添入シ都合拾万兩ノ内各五萬兩ノ報効銀ヲ除キ其餘ノ拾五萬兩ヲ以テ開坑ノ資本ニ充當スルコト衆議ニテ協定セシ會社名猶舊ニ仍リ華興利煤礦公司ト謂フ今又議定セル定款ヲ左ニ列記ス

定款

第一條 本公司資本七拾萬兩トシ壹百兩ヲ以テ一株トス株每股(股票)一枚利札(息摺)一枚定款再ヲ發給ス出資株(銀股)ノ外ニ權利株(身股)四百株ヲ加ヘ合セテ二千株トス權利株本公司ノ創業者及之ニ与テ最モ功勞多キ者ニ對スルノ報酬ニ充ツルモノニシテ只株者ニシテ然レテ利札ヲ給セズ又

權利株ニ唯々其數額ニ應ジテ(銀股)出資株ト同様公平ニ利益ノ分配ニ与ルベシ他人ニ轉賣スルヲ得ス

第二條 一旦株者ヲ發給シタル時株主ニ隨時其株金ヲ引出スコトヲ得ス株主若シ株者ヲ轉賣セントス時其須ク先株主相互ノ間ニ於テ賣買ス可ク私カニ賣買スルコトヲ得ヌ如シ果シテ株主間ニ收買者有リ時ハ始メテ他人ニ賣買スルコトヲ許ス然レハ亦株主全体ノ前ニ於テ言明セサル可ラス以テ濫賣ノ流弊ヲ免ル

第三條 定款確定ノ後總株金ハ之ヲ道勝銀行ニ預入レ隨時引出スコトヲ得其利子ハ年七分ニシテ道勝銀行ヨリ附ク取俸後ノ利益配當期ハ一月前ニ於テ各株主ニ通達ス各株主ノ利札ヲ持シテ往テ之ヲ受クヘシ如シ利益ナクハ配當金利子ニ概シ附与セズ

第四條 露清株主總會は右各款ノ取締後ノ選定し品行端
正ナルモノヲ以テ之ニ充ツ尋常微細ノ事務ハ取締後ノ通商
處分ヲ認メ其外炭坑ニ使用スル人員ハ右兩人ニ相談選用
スルヲ得又事務員ノ坑夫等ニミテ用ニ堪ハサル者ハ取締後
ハ隨時之レヲ更換ス取締後ハ之ヲ得ル事故ノ為ニ親シク
事務ヲ處ス能ハル場合ニ其信任スル人ニ托シテ代理セ
シムヘシ

若シ重要緊急ノ事件ニ遭遇シ先時ハ取締後ヲ隨時株
主中ノ居所近クシテ且ツ株數較々多キ者ニ通知ス通知ヲ受ケ
ル株主ハ總公司ニ赴キ會議ヲ開キ(總會)衆議ニ附シテ處分
ニ採決ハ株式數ニ依リテ定ム議決事故ハ別ニ冊ノ記録
簿ニ記明シ各株主ニ署名捺印ヲ請ヒ以テ後日ハ選定
ス株主ノ中事故アリテ出席不能ナル者ハ道路較々遠

クシテ一時ニ通報シ得サル者ハ即チ列席スル所ノ株主ニ於テ決
議スル席ノ株主ハ之ニ異議ヲ持ツヲ得ス

第五條 炭坑ノ役員ヲ雇用スル時須ラテ保証人ヲ之ニシテ萬
一侵蝕等ノ弊アリテ保証人ヲシテ賠償ノ責ニ任セ且支拂
スル所ノ俸給ハ其勤怠職務ノ煩簡ニ依リ精密ニ酬勵シ
テ之レヲ定ム情實ヲ以テ人ノ採用スルヲ得ス

第六條 本公司所用炭坑護衛兵丁ニ食糧ヲ給与ス

第七條 奉天省城ニ總公司一所及石炭發賣所ヲ設ケ炭
坑ニ分公司一所ヲ設ケ其外若シ分公司ヲ増設スル如キアル
時ハ隨時商辦スヘシ但シ各分公司ハ均ク總公司ノ管理ニ
歸ス

第八條 炭坑所用ノ物資ハ本公司ヨリ直接自辦シ利源
ノ外溢ラ防リ

第九條 現在炭坑に工人より採掘せし着々効果ヲ著セツアリ
猶十將來設備ヲ擴張シ機械ヲ改用在場令ニ隨時會議
決定ス可シ

第十條 運出炭ノ為メ將來鉄道ヲ布設在場令ニ總會ヲ開キテ
商議シ之ヲ本公司ノ利便ヲ圖ル可シ因テ餘利アル時
株主ト股東人株主均シク均シク株數ニ照ラシテ之ヲ分配ス

第十一條 上納スルノ破産税ニ破産規則ニ依ル可シ
第十二條 毎年公司ノ費用並ニ株主ニ對スル利息年七厘ニテ
除去シ猶剩餘アル時其一分五厘(老万ニ對シ百五十兩)ニ後
ノ慰勞金トシ其他ノ剩餘金ニ總會ヲ開キ配當金額次
年擴張費等ヲ決定シ收支決算書ヲ印刷シ株主ニ
分配ス

第十三條 凡ソ各株主ノ利益ノ配當ニ均霑スルト同時ニ缺損ニ

對シテ株數ニ准シテ之ヲ負担ニ任ス
以上各條ニ總會ニ於テ議定せん所ニ係ル若シ將來未だ盡
サル所アルヲ發見セ直シテ隨時増削シテ完成ス可シ

(説明)

一、第三條ニヨリハ株金ハ總テ道勝銀行ハ預金トスヘキ筈ナリ
 之實際ハ右王承堯ハ其靠ルヘカヲ知リ他ハ清國錢莊
 二預金トシ同銀行ハ唯其持株ノ拂込金三万七千五百兩ヲ
 預金トセシメ

二、第四條ニヨリハ露清兩株主ヲ各一名ノ取締役ヲ選出スヘキ
 ノ規定ナルモ道勝銀行ハ未ダ之ヲ選出スル買辦ノ常
 二本公司ト往來シテ相談ニ預ルニ實際ノ事務ハ王承堯
 清人株主ヲ代表シテ取締役ノ事務ヲ代理セシメ其他ノ事務
 負坑夫ニ至ラ進亦皆清人ノミナリ

四、株主及株式数

堂名	株主姓名	株数	株金額	堂名	株主姓名	株数	株金額
公濟堂	增祺	五拾株	五千兩	益善堂	英凱	五拾株	五千兩

學忍堂	榮綸	六拾株	六千兩	積善堂		拾五株	千五百兩
長餘堂		五拾株	五千兩	和義堂		拾五株	千五百兩
源豐堂		拾株	千兩	厚德堂		拾株	千兩
九如堂		五拾株	五千兩	會聚堂		拾株	千兩
德業堂		四拾株	四千兩	日昇堂		拾株	千兩
純德堂		四拾株	四千兩	慶豐堂		拾株	千兩
芝怡堂	吳英	六拾株	六千兩	錦隆堂		拾株	千兩
福積堂		四拾株	四千兩	得祿堂		四拾株	四千兩
長餘堂		四拾株	四千兩	日昇堂		拾五株	千五百兩
茂德堂		五拾株	五千兩	廣仁堂		拾株	千兩
槐蔭堂	王承堯	四拾株	四千兩	福厚堂		拾株	千兩
得祿堂		四拾株	四千兩	榮祿堂		拾株	千兩
餘怡堂		拾株	千兩	禮華堂		百株	壹万兩

有恒堂	五拾株	冬千両	文善堂	五拾株	五千両
芝怡堂	四拾株	四千両	道勝銀行	六百株	六万両
崇道堂	四拾株	四千両	樂生堂	四拾株	四千両
長籬堂	四拾株	四千両	梁懋德堂	拾五株	千五百両
鷹出堂	拾五株	千五百両	明心堂	五拾五株	五千五百両

右株主ハ三拾三堂ニシテ 総株數千四百株資本總額拾六万両
 以上 此外定款所規ノ如ク四百株ノ權利株アリ 公司内ニ其
 所有者拾人ニシテ各己株ヲ有シ他ハ多ク 將軍衙門内ノ官吏差
 役等ニ慰勞トシテ與ヘタリト云フ

五、証據書類訳文

甲号 千金塞炭坑開掘願書(訳文)

変乱以來物力凋弊財政奇絀致シ目下善後經營ヲ致シ
 三經費ヲ多要致シ商務ヲ振興スルニ非レヨリハ其經費ヲ

充不能ラス夫商務ヲ興スハ尤モ地利ヲ尽スニ有之矣秦西各
 國ヲ考察仕夫ニ凡ソ地中ノ五金及石炭等法ヲ設ケテ開掘致
 サル者ハ無之矣奉天省ハ良礦林立曾テ官省ノ開掘ヲ經
 申夫モ或ハ開掘方法恒數カラズ或ハ資本不足為ノ屢々停止
 仕居夫竊カニ維フニ金銀各礦ハ礦脈ヲ尋不及開掘スル
 ニ容易ラス然レ石炭ハ其用途廣キニシテ開採モ亦々容
 易ニ夫 開平公司及湖北大冶江南徐州等ハ皆之ヲ証明シテ餘
 有リ矣奉天省ハ炭礦佳良且ツ多額ナリ 乾中撫順界内
 虎山台(老虎台)千金台(千金塞)揚柘堡萬連金ハ炭
 質甚多佳ニテ且ツ地ハ高原ニテ夏期淹水ノ患無之者レ
 之ヲ開採致夫ハハ事半ニシテ功倍ニ申夫 自分等 詳ニ
 考定致シ夫ニ確カニ見込有之矣因ニ資本四萬兩ヲ集
 メ内一萬兩ヲ以テ報効銀ト致シ開掘後ハ御規則ニ準シ納

税可仕決シ滞納致ス様ニ不仕テ御許可ヲ得テハ報
効銀ヲ上納致シ再ニ規定ヲ更ニ上申御許可ヲ經可申
テ又公正廉能ノ委員ヲ御派遣相成督同辦理致シテ
之ニ宜布右御訓示ヲ仰度此段及御願也

光緒二十七年五月

候選府經歷 王承克

奉天將軍 增祺 殿

乙号 試掘許可書

候選府經歷王承克等先後請願シテ株式ヲ以テ千山台等
ノ炭礦ヲ開掘シ並ニ各處ノ西ヲ報効セシム委員ヲ派遣
シ該請願者ト共ニ該處ニ赴キ實測ノ後境界ヲ定メ楊柏
堡河ヲ以テ界トシ東ハ翁壽ニ西ハ王承克ニ開掘ヲ許
セシム委員劉朝鈞祥德等既來後命ニ請願者等
ハ已ニ報効銀壹萬兩宛ヲ献納シテ應キニ試掘ヲ准スレ

與系副都統及承德撫順駐劄ニ命レ保護彈壓シ
且ツ出示曉諭ヲサシムル論請願者ノ堅ク規則ヲ遵守
シ速カニ開辦スレバ凡ソ民間田園廬墓等ノ有ル所ハ迂
迴シテ之ヲ避クニ若シ買上ケテ要ス時ハ相當代價ヲ
支拂ヒ強要平做スヘカラズ又該礦區ハ既ニ確案ニ分界
シラレハ自ラ開掘スヘキ地區ヲ嚴守シ互ニ相侵俗シ爭端
ヲ興ラヘカラス

其礦稅ハ奉清ニシテ之ヲ定メテ請願者一面精實ニ辦
理シ一面定額ヲ定メ及何日ヨリ納稅スヘキヲ定メ上申スヘ
シ且ツ開辦ノ情形ヲ報告シ驗査ニ便ニスヘシ

右各事項ハ請願者ニ於テ嚴守スヘキヲナリ

光緒二十七年八月七日

奉天將軍 增祺 印

丙号 千金山炭坑試掘願書(訳文)

先般請願致し置キ矣千金塞炭坑ニ関シ試掘ヲシ且其定
款ヲ定メ上申スヘキ御訓示ニ預キテハ茲ニ資本主等ト相
談ノ上定款十條ヲ議定仕去同此ニ相添ヘ御驗査
ヲ相願申矣又八月十七日該炭坑ヲ試掘仕度矣之該處高氏ノ
善良ナル者ハ固ヨリ甚ク地方ノ公益トラ喜ヒ去々其不肖
ノ匪徒ハ抵抗阻害事端ヲ滋生致シ去々ハ惟ク地方官ニ彈
壓保護ノ御下命被下告示ヲ願ヒ去々ノミニテハ猶安心致ス
可カラス特別ノ御詮議ヲ以テ平素ノ永久ニ御駐隊被下
ス様願上度矣也

光緒二十七年八月日 王承亮

奉天將軍 增祺 殿

丁号 千金塞炭坑ニ関スル上表

臣增祺等 謹テ表ス奉天省ハ右礦林立ス數年以來炭坑
ヲ經タリト毎ニ向風氣未ク固ク爲ニ中止ス昨午變亂ノ爲
メ又復々停止ス多シ現ニ兵燹ノ餘ニ當リ善後經營
ヲナスニ多額ノ經費ヲ要スル應サニ曰ニ仍ク商ヲ招キ開辦シ
以テ利アルハ必ス興シ以テ不足ノ經費ヲ補足スヘシ況ハ清商ノ
經營スル所ハ國家ノ政令ニ違反スルヲ如シ果シテ風水ニ
害アリ他ニ妨礙ヲ去ニ於テ禁止シ易ク惟ク利源外溢ノ慮ナキ
ニテ且ツ之ヲ管理スル條錢シニ在リ茲ニ候選知縣翁壽
候選府經歷王承亮各報勅銀一万兩ヲ献納シ極順界内ノ
千金山炭坑廣ク開掘セト請フ因テ直ニ委員同知劉朝鈞等
ヲ派遣シ該商人等ト同行査勘シ楊和堡河ヲ以テ界トシ
河東ハ翁壽河東王承亮ノ開採ヲ許サントシ委員等ハ該
商又々實力開辦スル起証ヲ取リ復命ヲ臣等 伏シテ

千山名ヲ著スルニ因リ封禁ノ地ニ係ル地固ク按ズニ塔処ニ福
陵ヲ去ル四十餘清里且ツ中一河ノ隔テ又東者洪跋条
約ニ依リ凡ソ洪跋所在地ノ須ク陵内候三十里外ノ地ニ在
ルニ該商等開掘ヲ請願スル者礦ハ洪跋条約ニ比シ
テ遠シ且ツ該礦ノ脊脈ハ其質モ亦佳ク若シ時ニ及ニテ開掘
セザル必ス起テ其利ヲ収ム者有リ右サニ御覽許ヲ得テ地禁
開採ヲ許可スルハ以テ利源ヲ擴ルニ若シ之ヲ許サハ風氣
既ニ開ケ各商自ラ必ク興起セ其後ノ石山若シ風水ニ害
ナリ封禁以外ノ地ニシテ其陵内候ノ距ル較速キ地ハ亦隨
時開採ヲ奏請セ如シ御裁可ヲ蒙ラ再ニ規則ヲ詳定
シ更ニ奏上セ又巳ニ前等ニ飢命シ先ツ試辦ヲ行ハレノ
善ニ全權大臣外務部礦務局ニ委咨ヤ茲ニ奉天
省礦務ヲ推廣開採ヲ請フ件伏シテ 皇太后皇上

兩陛下、御裁可ラシテ臣等謹誠恐誠惶謹奏

臣等 開採許可書(譯文)

本將軍府尹ト會同シ光緒二十七年八月二十日具奏ニ奉天
省各礦ヲ分別推廣開採シ以テ利權ヲ保テ籌款ヲ資ケ
シコトヲ 請願セシ茲ニ十月二十四日ヲ以テ 御裁可ヲ得タレハ
謹ニテ 御主意ヲ体ニ規則ヲ遵奉シテ開採スヘシ

承辦千山台等處煤礦負商 王承堯

光緒二十七年十月二十九日

奉天將軍 增祺印

已上 露人 鉄道敷設ニ関スル 函書

私儀四月十九日 千山台等處 坑ニ赴ク為テ撫順千金寨迄ニ到リ
其ヲ 鉄道 布設コトヲ 調査致シ其ニ其工夫ノ言ニ據ルハ
鉄道ハ蘇家屯ヲ東方ニ至ニ至ニ石寨迄ニ該工致ニ揚拍堡

老虎名之五、亦近、在、ト、事、又、露、軍、隊、千、金、審、審、
駐、劄、之、丁、四、十、餘、名、之、夫、然、之、岩、坑、之、事、曰、仍、自、分、等、
坑、夫、之、同、掘、致、辰、之、夫、地、方、亦、安、靜、之、有、之、夫、私、備、干、
八、日、歸、奉、任、夫、道、勝、派、行、之、執、之、詢、同、任、之、誤、道、其、他、
第、之、所、之、無、之、露、軍、之、亦、其、欲、遣、之、所、之、無、之、自、御、
座、者、在、為、念、及、御、届、也、

光緒三十年五月 日 王承堯

奉天將軍增祺 殿

庚 号 再、採、掘、之、役、事、之、願、書

撫、順、華、興、利、公、司、之、本、年、春、季、之、兵、端、請、カ、ラ、サ、ン、為、
停、工、致、之、居、リ、カ、秋、後、之、至、ク、若、シ、開、工、不、致、マ、ハ、冬、
期、名、城、商、民、之、燃、料、之、乏、ク、之、感、シ、可、申、夫、向、又、十、月、十、日、之、至、
リ、坑、夫、之、集、致、之、同、採、掘、之、度、夫、之、露、人、カ、リ、ト、ス、ト、フ、シ、ン、ト、
等、何、等、相、談、モ、ナ、リ、本、公、司、界、内、之、鉄、道、之、敷、設、之、洋、屋、ヲ、
建、テ、夫、ハ、願、本、公、司、之、妨、害、有、之、又、但、石、炭、之、買、買、ス、
ル、ハ、ナ、ス、勢、位、領、心、之、如、ク、之、夫、同、何、分、御、處、置、有、之、
度、此、段、及、御、願、也、

光緒三十年十月 日 王承堯

奉天將軍增祺 殿

辛 号 岩、坑、カ、露、人、之、領、受、ケ、レ、届、書

正、月、十、二、日、公、司、之、番、頭、王、技、手、等、情、報、之、據、之、岩、坑、之、カ、リ、
ラ、ト、フ、露、人、四、百、餘、名、之、事、ヒ、テ、參、ル、本、公、司、之、何、等、ノ、相、談、
之、レ、肆、之、採、掘、ヲ、始、メ、申、夫、之、最、宜、希、敵、セ、ス、如、何、ト、モ、ス、ハ、キ、様、魚、
之、夫、又、外、之、露、人、三、百、餘、名、有、之、石、炭、之、汽、車、之、運、搬、致、之、居、
リ、夫、露、人、採、掘、外、坑、ハ、仍、旧、如、ク、我、カ、坑、夫、之、採、掘、セ、シ、辰、之、
ハ、共、一、切、發、賣、セ、シ、ノ、ス、夫、私、備、猶、ホ、之、ヲ、調、査、致、シ、夫、之、相、違、也、

之矣然此今日の時句之ヲ阻止スルカ爲之誠ニ迷惑仕成ス
同何分ノ御詮議相願度也

光緒二十一年二月 日 王承堯

奉天將軍增祺殿

任了 日本軍ニ對シ照會ノ願書

山名ノ石炭原ト株式ヲ買カシテ經營致シ先後清商株
金拾萬兩ヲ集メ嗣テ道勝銀行ノ株金六萬兩ヲ附加
致シ夫然ルニ現在該銀行ノ株金僅ニ三万七千五百兩ヲ收メ
シ又露人鉄道ヲ布設シ石炭ヲ強買シ株權ヲ肆行致シ等
種ノ強横ノ情ニ時御由申上置キ去ルニ有日本軍未奉
六日曉諭ヲ示サ民難ヲ休恤スル意アリ願クハ本司ハ
清商ノ剣立セラルニ有之後ニ道勝銀行ヲ加名致シ夫
有之夫ハ露人ノ業務ト疑ヒテ様御照會ヲ被下度

此段奉願也

光緒二十一年二月 日 王承堯

奉天將軍增祺殿

撫順公司

撫順公司ノ干係人ハ皆逃匿シテ就テ調査スル由志不得
已比較的偵スルノ隣境ニ在リテ同業ヲ営ミ居リ王承
堯ニ就テ聞キ得ル所ヲ左ニ記ス

一 礦區

西揚州堡河ヨリ東ニ夾棒山ニ至ル其距離三十餘清里北ハ渾
河岸ヨリ六七清里南方迄ノ間ニテ楊州堡老偉台力達
屋等ノ炭坑ヲ含有ス

二 沿革

同公司の事務、出願せしむるに華興利公司王承彦が同時の請
願試掘及許可を得たるに華興利公司の部に見え
ルカ如し向に其開掘當時の資本僅かに二万五千兩にして一株の千
両より向に李聘三丁某(名不詳)等、其資本を主として
キ光緒二十七年八月末華興利公司に訴訟を起し、前記
ノ如し此頃、前記の資本、不足を感し居るに、華興利公司の合
同ヲ勸メシメ、彼は是を聴カズ、李聘三ヲ命じて紀鳳台露商
ローレンツ等ト結託し、訴訟の立丹に古蹟を以て翌年八月に
月頃ト覺テ公訴の念、之ヲ紀鳳台に売却せり、將軍増祺
ハ其許可ナクシテ濫リニ露ノ御用商ニ売却セラルに彼は之ヲ
逮捕せしむるに、彼は逃匿し、今其往々処を究む能はず、紀鳳台ノ
買價何程ナリシカ知ルニ由らず、聞ク、此ヨリ一々兩ノ株ニ對シ
其額面金高ノ外ニ猶一々五百兩ヲ支拂ヒ、特ニ公訴書にハ四

五々兩ヲ徴せり、去るを見、六七二兩ヲ支拂ヒシト云フヘシ、紀
鳳台ハ又之ヲ光緒二十九年春朔ニ於テ露商ローレンツに売
渡シ、ローレンツハ往來紀鳳台共ニ露ノ御用商ヲナセシメ
シテ同家坑ニハ紀鳳台共ニ露ノ御用商ヲナセシメ、
其購買價格も亦知ル由らず、當時市人ハ紀鳳台ノ所
得約十七八万兩ナリト云フ、ローレンツハ亦未露ノ武官(姓名不明)
監督保護ノ下ニ在リ、開掘ノ露國亦洋屋ヲ建築シ、事務
務員ハ露人ニシテ支那坑夫ヲ使役シ、向に三十一年
間以降極順支線ノ鉄道敷設竣工後ハ之ヲ運搬シ、東
清鐵道會社ニ供給シ、以テ我皇軍ノ兵糧スル以前迄從事
シ居リ、向に其當市ニ於テ公司ハ大東門外木道公
司内ニ同居ナリト云フ

六合公司

六合公司、當地馬隊管官守備龍潭、名、ヨリ、開キ、セ、ニ、其資本主
資本倉老、如、

安樂堂	東兵管	二、一五八	吊	三
存仁堂	博裕公司番頭等	二、〇〇〇	〇	〇
阜豐堂	馬龍潭	二、〇〇〇	〇	〇
富裕堂	丁少爺	二、〇〇〇	〇	〇
泰記	北門外李姓	一、四〇〇	〇	〇
李元堂	同 上	一、〇〇〇	〇	〇
濟象堂	馬龍潭家僕同	五〇〇	〇	〇
富有利	各小資本家合同	六〇〇	〇	〇
五福堂	戶部五房、小吏	四〇〇	〇	〇
張雨亭		三、〇〇〇	〇	〇

劉振亭
陸靜亭

三、〇〇〇、〇〇〇
一、〇〇〇、〇〇〇

合計

三、七、九、二、九、六、一、〇

即約三、八、〇、兩、資本、三、七、九、二、九、六、一、〇、以前、此外、戶部、內房、
三、三、資本、三、〇、〇、積善堂、興業堂、(各三、千、吊)、德順堂、(二、千、有、八、十、五、吊)、
左、三、於、出、資、セ、シ、五、部、裁、撤、ト、共、今、年、三、至、り、收、回、シ、タ、

博裕公司

一、礦區

管盤所屬、石門寨南山即今興京傷廟紅旗官地、係、東、新、北、嶺、
ヨリ、西、石、門、寨、西、嶺、三、至、八、十、清、里、南、窪、潭、水、北、嶺、即、古、子、毗、連、山、ヨリ、
北、山、後、即、驛、馬、站、石、炭、密、勾、掌、(總、在、大、桃、子)、等、地、方、近、ト、ス、

二、沿革

候選知縣丁汝高、候補駙騎校魏豐元、候選縣丞閔襄太、五品頂戴董德昌及修福公、五人にて一萬兩ノ資本ヲ出シ内ニ千兩ヲ礦稅ノ先拂及報効銀トシ八千兩ヲ以テ資本トシ決シテ外人ヲ引キ入ルコトナキヲ誓ヒ礦區ハ東、渾河、西、下、章、丹ニ至リ南ハ渾河北ヨリ北ハ倉什ニ至リ同約十餘清里四方ノ地區ヲ劃シテ光緒二十七年十月間堀願書(甲号)ヲ呈出セリ
堀將軍ハ之ニ對シ興寧協領及同知命シ其地ノ實況ヲ詳報セシメシヨリ(乙號)逾ヘテ二十八年五月丁等ハ前願書記載ノ礦區ハ誤リシレバ之ヲ營盤屬ノ石門寨南山即チ廂紅旗官地ニ係ルモノトシ東ハ新屯嶺ヨリ西石門寨嶺ニ至リ南ハ渾水北嶺ヨリ北ハ本山後ニ至リ東西約十清里南北ハ山ヲ隔ツル間ト訂正シ速ニ開堀シ度キ旨ノ願書(丙號)ヲ呈出セリ
將軍ハ此ニ於テ知府孫葆璋ヲ委員トシ實地踏查復命セシム其踏查ノ結果ニヨレハ三ノ障害ヲ發見セリ即其地區内南大桃子山下秃尾把溝ハ

盛京戸部カ三陵祭祀ニ用ル牛羊ノ飼育場ナリ之レ其ノナリ其附近金家墳アリ之レ其ノナリ炭質佳ナラス且炭層ハ僅ニ六七寸ニシテ開採スルモ益ヲ見ス之レ其ノナリ故ニ該商員等ヲ以テ再ニ詳查シ更ニ願出セシムヘシト故ニ將軍ハ實查再願スヘキヲ命ス(丁號)之レ八月七日ナリ
又同月丁等ハ其障害ニツキ戸部牛羊飼育場ハ借地トシ金家墳ハ外務部所定ノ礦山條例ニ准據シテ辦理スヘク炭層炭質共ニ良好ナラサルモ猶土民ノ用ニ供スルニ足ルノ故ヲ辨明シ資本ハ唯前述五名ノ外決シテ他人ヲ加名セサル旨ヲ誓ヒ(戊號)開堀願書ヲ差出シヨリ將軍ハ此ニ於テ猶ホ開堀ニ適スルモノト認メ唯チ戸部飼育場ノ處置ハ外務ニ照會シテ決定スヘキヲ諭セリ(己號)
十月十四日以外務部ヨリ外人轉賣セサル旨ノ誓約書及資本金款明細書ヲ呈出セシメ具開掘着手日期ヲ報告セシメテ許可スヘキヲ照會シ來ル故ニ將軍ハ十月十日付ヲ以テ許可書(庚號)ヲ付與ス此ニ於テ丁等ハ同月中

其據約書資本明細書ヲ添へ本月十日ヨリ開掘ニ着手スヘキコトヲ請願
セリ(壬辨)願書中又地方官ニ下命保護彈壓セラレシコトヲ以テ之ニ對シ
將軍ハ決シテ外人轉賣スルヲ許サズ又該公司需用ノ地區モ奉定章程
ニ遵ヒ唯掘井建廠用ミトシ多估ヲ許可セズ又畫面ヲ調製シ届出スヘキ
旨ヲ命シ更ニ資本金一萬圓ハ已ニ點驗シテ之ヲ返還シ其上納スル部費
一面商ハ暫ク預リ置キ外務部ニ照會スヘシ且彈壓保護各該地方官
及礦務委員李佩說ニ命セル旨ノ通知ヲ受ク(幸辨)
即チ該坑ハ光緒二十八年十二月一日ヨリ開掘權ヲ得十日ヨリ開採ヲ始メリ爾
來資力不足ノ為メ同公司ハ石門寨ノミヲ開掘シ自龍山番子ハ六合公司大安公
司ニ貸與シテ開採スル採炭百斤ニ付キ二十斤ヲ收メトシ十九年七月ヨリ開採セシム
而シテ其貸與開掘ノ期限ヲ定メス而當事者任意繼續廢約シ得ト
云フ他ハ前報告ト同シ而シテ大安公司ハ當奉天ニ店舗ヲ有セス唯該礦山
ニ開店スルコトヲ以テ開掘スル由ナシ云々同公司トモ日露戰役ノ為メ光緒三十一年

二月ヨリ傳工スルコトナリ溥裕公司ハ現ニ大東門外煤炸市ニアリ目下殆
ト營業シ居ラス今其資本未現狀ヲ聞クニ

丁汝昌ハ昨ラ子英トシ候選知縣ニシテ雲南貴州ノ人光緒三十一年正月ニ
一日懷德縣知縣衙門ニ赴ケリ即同縣采善ハ地方ノ土匪其天主教堂ヲ破
壞シタル事光緒三十年十二月廿九日前後革職セシ廖姓之ヲ署理シ同月
二十日赴任セリ廖ハ原ト貴州ノ人ナリ以テ丁ト同識アリ即チ丁ヲ聘シテ
教育ノ任ニ當ラシメタルナリ

魏豐兆雪想ト稱シ撫順ノ候補驍騎校ナリ閩裏太贊臣ト稱シ鳳凰城ノ人
候選縣丞ナリ豐德秀東ト稱シ五品頂戴ナリ右三名本年八月中旬北京ニ
赴ケリ其何ノ用ナルヲ知ラス

三、願書及許可書(譯文)

甲号) 開掘第一回願書

商務ハ利權ノ帰ル所ニ有之開礦ハ實ニ商務ノ先事ニ候故ニ各省曉諭ヲ

下レ礦務ヲ求ルニ假然ニ東省ニ於テ開礦致シ成功セシモ八十中二三有之候是レ地下宝ヲ出サル欵抑モ亦少株掘ノ法未ク善カラズ他ク利權ノ一ト不トニ基キ申候一ト則チ責任ノ攸賜スル所有之外人其間ニ乘スルノ暇無之候分ルハ則チ同室ニ相併立シ争鬪踴ラ旋テ来リ申候是レ其礦區ノ大小ニ基クモノハ無之其責任者如何ニ因ルモノニ有之候自分等此ニ鑒ミ所アリ競々業々トシテ敢テ冒昧ノ請歎ハ不致候茲ニ營盤地方ニ於テ炭坑ヲ開掘致シ度其礦區ハ東ノ渾河ヨリ西ノ下章丹ニ至リ南ハ渾河北岸ヨリ北ハ倉什ニ至リ間約十餘清里四方ニ有之候巴圖ノ千山台ト相距ル數十里均ク荒山ノ官地ニ屬レ居民ノ房室墳塋ニ碍ナリ龍脈風水ニ關スルト無之候自分等若查再三致シ候尚ホ可辨ニ屬シ候故ニ資本一萬兩ノ集メテ二年兩ヲ以テ礦稅保証金及報効銀ト仕リ八千兩ヲ以テ資本ト爲シ試掘致シ如シ炭層興旺ナレハ更ニ資本ヲ増加シ改メテ請歎仕可ク税金必ス滞納仕レ間敷候自分等ハ利權自辦ノ目的ニ決シテ外國人ヲ援引附和致シ事端ヲ生シ國家商務

ヲ維持セラシム盛意ニ背キ申候様ノコトハ不仕假如シ御允可有之候ク御下命ヨリ糧餉處へ報効銀ヲ收メ可申候間速カニ御許可相成度奉歎僅也

光緒二十七年十月

丁如高

增祺將軍

外四名連署

乙卯

營盤炭坑ノ開掘セシトル願書ニ據リ該地ハ荒山ニ屬シ唯ダ六七里四方ノ地区ナリト其荒山ノ果シテ官地ナレバ又該地方ニ興京所屬地ニシテ陵寢風脈ト妨碍アルヤ否ヤ詳細ニ查明スルヲ要ス故ニ興京協領及同知ニ命レ確實ニ查勘シ地圖及說明書ヲ付シ具申セシム其復命アルノ後再ニ下命スヘキモノナリ

奉天將軍增祺

丙申

第三回願書

光緒二十七年十一月内堂盤炭坑ヲ掘リ白ク請願スルニ置カレ已ニ數月ヲ
徑過スルモ未ク其行の毎上出私者存年四月破師ト決示ニ赴キ查者任
其前記ニ載仕テ破運運轉ニサヘハ此ニ訂正仕テ即チ堂盤地方ノ
石門寨南山即チ興宗廟紅旗官地ニ在之東ハ新屯嶺ヨリ西ハ石門寨西
嶺ニヨリ南ハ崖崖水北嶺ヨリ北ハ本山後ニヨリ東西十里南北僅カニ一山ヲ隔
ルニ其地既開ノ千山台ト同脈ニ出風脈房墓ト何等ノ故障無ク
同興官帳帳及同知ニ即下命被下確實查勘セラレ可成速ニ開掘ヲ得ラ
レ修補出許可キ事茲ニ此段更ニ奉新上セヤ

光緒二十八年五月

丁汝昌

公四名

增將軍殿

丁部

丁部ノ請願ヨリ知府孫存瑞ヨリ派遣シ查勘セシム其後命ニヨリ石門

寨ト堂盤ト相距ニ十五里興京廟紅旗界ノ地トシテ本村ノ人家八千余戸ア
リ決破區ハ永陵ヲ距ルニ一百十里福陵ヲ去ルニ九十里ヲ隔ツ即チ陵寢ノ風脈ト
妨碍ナシ又民舍ト相隔ツルニ二里ノ外ナレハ是亦妨ナシ然レハ此破區内南
大桃子山下先尾把溝ニ炭坑アリ盛京ノ新ノ三陵祭祀ニ用ナル牛羊
ノ飼育場ニシテ又之ヨリ四十五歩ヲ去ル地ニ金家墳アリ之レ何レモ故障ト
ナレ即チ官地ノ將ク該部ニ照會シテ其意見ヲ問フヘシ又該處ノ石炭
ハ曾チ人アリ先尾把溝ヲ採掘セルモ露人ノ之ヲ見テ用ニ堪ヘスト云ヘリ況ニヤ
其礦層僅ニ六七寸ニ越ヘス之レ亦故障ノナリ又丁部ハ稱ス千山台同脈
ナリト然レハ千山台ハ渾河ノ南ニシテ決坑ハ北ニ在リ其同脈ニ非カル知ルヘシ
又其親書ニ礦區ハ東ハ新屯嶺ヨリ西ハ石門寨西嶺ニヨリ南ハ崖崖
水北嶺ヨリ北ハ本山後ニヨリトアリ然レハ崖崖水北嶺ハ北岸ニ在ルニ北
嶺ナルモノハ土語ニアラス土人モ亦之ヲ知ラス抑モ吾子毗連山ナルヤ本山後
トハ南大桃子山後ナルヤ抑モ石門寨ノ後山ナルヤ不似ナリ右ノ諸事情

ヨリ奉^レスレハ、丁^三請^ル以^テ来^テ一^ノ年^ヲ任^スル^ニ猶^ホ実^査セ^ルカ^ル也^シ炭^層僅^ク
カ^ニ守^ト多^ク也^ニ依^テ更^ニ搜^尋セ^ル有^リ利^ノ脈^ヲ察^スル^ニ得^ヘシ^ト丁^三等^ヲシ
テ更^ニ實^査シ^テ方^法ヲ^講シ^テ再^ニ願^スセ^ルヘ^シト
右^ノ状^情ヲ^以テ更^ニ實^査再^ニ願^スヘ^シ

光緒二十八年八月七

奉天將軍博祺

戊申 第三回 願書

丁^三光緒二十八年八月廿二日、請^ルヲ^セリ^然レ^テ八月七日、告^シテ^{ヨリ}商^務
ヲ^維持^セラ^ルル^ニ由^リ盛^意ハ^深ク^知悉^仕候^自分^等願^スル^炭坑^破産^ノ管^理
所^屬石^門寨^南山^即チ^廂紅^旗官^地ニ^シテ^東ハ^新屯^炭ヨ^リ西^ハ石^門寨
西^炭ニ^ヨリ^南ハ^崔澤^木北^炭即^チ吉^子毗^連山^ヨリ^北ハ^本山^後即^チ驛^馬站
石^炭富^向堂⁽俗^名大^桃子⁾等^ノ地^区ト^ス其^炭脈^ハ燠^炸ト^シ本^地土^人
ノ^需用^トス^ルニ^足リ^露人^カ汽^車ノ^用ト^スル^ニ無^ク若^シ該^地区^内盛^京戶

部^ノ牛^羊飼^育場^右之^地租^ヲ納^ラテ^借地^可仕^テ金^家墳^外務
部^所定^ノ破^産條^例ニ^准シ^テ處^辦可^仕テ^自分^等該^坑開^採請^願以
來^正シ^ニ一^年ニ^及ビ^申出^テ同^破産^師ヲ^聘シ^テ驗^査仕^テ處^良好^トシ^テ
ニ^候モ^若シ^徒ラ^シ外^同ニ^誇張^改シ^候ハ^或ハ^外人^ノ爭^奪ヲ^惹起^可
仕^又或^ハ不^肖紳^商等^ノ強^奪ヲ^恐レ^ル未^ダ敢^テ處^カシ^テ詳^述改^シ
サ^リシ^以テ^亦又^該坑^丁汝^島叢^德昌^魏豐^兆閻^襄太^修福^公
ノ^五人^ヲ集^集頃^任組^合シ^テ開^採仕^テ他^ノ決^シテ^株ヲ^差リ^他人^ヲ加^名不
仕^候同^御許^可成^度此^段奉^願修^也

光緒二十八年八月

丁汝島

外四名

榜將軍 啟

已 詳

丁^三等^ノ上^申係^ニ炭^礦其^第三^回願^書ニ^ヨリ^ニ尚^ホ採^掘シ^得ヘ^キト^認ム

其盛京戸部ノ官地ニ係ルモノハ先ツ外務部ニ照会シ其決議ヲ俟テ處分ス可シ

奉天將軍ノ摺祺

庚申

光緒二十八年十月十日外務部ノ照会ニヨリ候選知縣丁等ノ請願書ノ如ク果テ確定炭脈官地借入方法其他ニ於テ相違ナク又該商人等眞實採掘ニ永久外ニ輕便スルコトナキヲ誓ヒ又其資本確定額ヲ本部ニ報告セシメ其誓約書明細書ヲ取リ後日ノ憑據トシテ許可ヲ與ヘ猶用擬着手ノ日期ヲ報告セシムラルヘシ

右札承辦興馬石門寨煤礦員商 丁汝島准此

右相違ス

光緒二十八年十一月一日

奉天將軍ノ摺祺(府尹玉連署)

壬申 第四回勅書

光緒二十八年八月七日實查再列スヘキノ命ニヨリ至碓氷ヲ是ク碓氷ヲ呈驗シ十二月朔日後ヨリ得申候可書ノ内遵守スヘキ條項ニヨリ此ニ永ク外人轉賣セサルヲ誓約書資本額細書ヲ奉呈仕候資本極細書ニ資本金一萬兩ニテ其外額定新章ニヨリテ新費一百兩ヲ上納シ度也

右ニ付キ資本一萬兩ハ所驗査上御返付相驗致又新費ハ所領收被下度候並ニ各地方官ニ御下命被下彈壓保護ノ告示所掲示ホ願申候又本月十日ヨリ周知ニ着手シ任事此段及所領收也

光緒二十八年十一月

丁汝島
お四五

協將軍殿

辛申

第四回勅書ハ之ヲ受理セリ丁等ノ同掘ス炭礦ハ外務部ノ許可ヲ得
タリト第トモ其需用ノ地區ハ奏定章程ニ遵ヒ唯鑿井建廠ノ各用
ニ足ルヲ以テ限トナシ多佔スヲ得ス又礦區圖面ヲ調製シ說明書ヲ
付シテ差出スヘシ資本金一萬兩ハ已ニ驗圖ヲ完セリ故ニ之ヲ返還ス
其ノ上納ノ新費一百兩ハ暫ク本將軍ニテ預リ置キ外務部ニ報告
シテ其命ヲ俟ツ又各該地方官及礦務委員李佩汝ニ一切ノ事ヲ
下命セリ誓約書明細書用紙日期等ハ徳ヲ之ヲ外部ニ報告セリ

光緒二十八年十一月

奉天將軍 增祺

明治 年 八月 廿七 日 起草
同 月 廿七 日 發 遣

生

信

主任

陸軍大臣

大臣

子山岩坂ノ付

外務省

子山岩坂ノ付ニ寄ル旨ヨリテ
其ノ事ニ三三九ニ寄ル旨信沙野ニ用テ
ニ付一紙送ルニ込度也

(沙野ニ寄ル旨ヨリテ)

也ニ寄ル旨ヨリテ
カニシテ信

三、因保言其苦於執
三、因保言其苦於執

明治廿九年

八月

廿五日

起草

大蔵

次人

山

長

主任

學

立法

林多作

林多作

6/ 千山岩坑

外務省

千山岩坑遺付、性之美し、
新多作、
月三十日附、
十二日附、
治平、
新多作、
三十四年

承竟ノ節壽リ所法以車西局
 其案権ヲ裁其人ニ授之此
 七年以公ニ至リ全ク裁其人ノ性
 名ニ屬シ（カウ）ノ年（カウ）ノ権ニ至リ
 亦軍隊ヲ在任録道
 年社ノ利便ノ為ニテ採掘（カウ）ノ
 自以才ノ所即チ曰露海ノ系物
 外務省
 中六條ノ所謂録道ノ利便ノ為ニ
 採掘ノ事ニ裁坑ニ至リ帝ニ請付
 所至ニ以テ之ヲ裁之能ク不件
 ニ至リ法ヲ改訂スル今法ニ以テ
 裁之但シ事ヲ免テ裁之能ク不件
 之ヲ採掘ノ所ニ至リ裁之能ク不件
 採掘ノ坑ニ至リ裁之能ク不件

明治二十九年八月三十一日抄録
大正政務局

煤炭第一〇五年

遼陽炭坑及鳳凰炭坑小山炭坑の領有
對る清國抗議の件

長谷川 十吉

機密 文第1746號

日本官憲が遼陽、大榆溝、張家溝、茨兒山、紅窰村、樊神堡等、炭坑採掘を禁止し、助炭、運出を令し、又鳳凰炭坑小山炭坑採掘を進行せしめり。以て天將軍より屢々日本領事官等と交渉せしむ。右の政府の命に基き、軍の必要に因り、えんモノに係り、且つ東清鐵道、社債の第四條に據り、會社に於て開堀、掘り、アモノナリト回答せしむ。又同將軍の電稟に基き、別紙圖、通清國政府より請ふ抗議の來り。察るるに、前掲炭坑中、鳳凰炭坑小山、除き遼陽ノ

在清國日本公使館

各坑に關し、件、過般奉天將軍ト森原總領事トノ間ニ交渉あり。日本軍憲が烟台炭坑中尾明山ヲ除く外、此ラ其採掘ヲ禁止し、尾山炭坑ニ區域ヲ劃定し、テ其他ノ炭坑ハ悉ク之ヲ領し、トイフ。同頭ト同一ノ案ニ之ヲ示し、手同總領事が奉天將軍ト其ノ之ニ復、圖ハ總領事より本使ニ送附有る。又其圖ニ載る所ノ烟台炭坑ハ東清鐵道全社ニ歸す。第四條ノ規定ニ依り、近ク南滿州鐵道全社ニ於テ採掘せしむ。ト主張。對し、清國政府ハ別紙圖ノ照會ニ於テ之ヲ駁撃し、該條の第四條ハ鐵道ノ採掘を地方一帯ニ於テ鐵道需用ノ石炭ヲ採掘せしむ。會社ノ許のし其斤數ニ對し、代價ヲ亦償せし。其類ハ、信監工又ハ其代理人より地方官ト協

議決定し他人ノ該地ニ於テ採掘スル炭ニ爲シ納付ス
程額ニ起ルコトヲ得ズト定ムルモノニシテ既ニ他人ノ該
地ニ於テ石炭ヲ採掘スルリ認メテ凡ガ故ニ本条ハ會社ニ
獨リ權ヲ與ヘシモノニ非ス況ンヤ遼陽ノ各坑ハ素ト
鐵道ヨリ三十浬程以内外ニ在リ以テ日本ガ之ヲ強力
ト領シ得ルノ理由ナキト論述致ス尙ホ清國政府ハ北
京條約會議録亦十號ヨリ引據シ同字ニ於テ鐵道
ニ附屬スル礦物ハ既ニ採掘ニ着手シタルト否ト拘ラス
公平且詳細ノ章程ヲ取極メ以テ互ニ遵守シ便ナク
ハシトノ主意起入セシムル人々ヤ本詳細ノ章程
尙未ノ取極メニ至ラザルニ方リ日本官憲ガ清人採掘
セシ遼陽ノ各坑ヲ差止メ貯炭ノ限日運去ル事
又鳳凰廳城北山ニ於テ採掘ヲ遂行スルカ如キ顯

在清國日本公使館

條約ニ合セテト主張致ス

思フニ帝國政府ガ日露講和條約第六條ニ據リ南
滿州ニ於テ露國ヨリ取得シタルモノト認メテ款
鑛山中ノ清國ヨリ露國アルモノ可ナク現ニ業
ニ于テ山炭坑還付ノ清國アル今亦相合炭坑
占領ニ對シ抗議ヲ見タル常ニ有ニテ露帝國
政府ハ従前露國カ南滿州ノ鑛山ニ關係スル實際
ニ於テ日也取極メ得タル所ト認メ日露間鐵道
交換ノ際露國委員ヨリ説明ヲ得タル所トシ採石
ニ關シト考査ノ上是非ヲ日露條約第六條ニ據リ
露國ヨリ讓渡セラルモノト認メテ款ニ於テ各鑛山
表ヲ豫メ調製シ又最モ我ニ有利ナル採掘条件
ヲ規定シ之ヲ基礎トシテ適當ノ時機ヲ俟テ

成るに又前反之述ぐ之鑑山表ノ第一ノ可成達之洞
製去成多級ニ之如使心得ノ為ノ一部以送付者
少抄之なり

別紙抗議ノ照會文鳳下若ニ如使ノ事見係之申進也
收具

明治三十九年八月廿三

在傍

特原全權之使林権



外務大臣子爵林董殿

在清國日本公使館

欽命全權大臣便宣行事軍機大臣總理外務部事務和碩慶親王為
照會事頃准

盛京將軍電稱日本人昨於遼陽大榆溝張家溝該見
山缸窰村樊神堡等處煤礦勒令一律騰出並將煤堆
限二十日搬盡又鳳凰廳城北山煤礦前有日本私人
煤業已禁止現又強行開採疊與該領事等磋商據稱
係奉政府之命軍用所需並引東清鐵路俄約第四條
稱該鐵路公司有開礦之權其實該條內係准公司開
採煤礦並非不准他人採煤且遼陽右礦在煙台鐵路
三十里以外今日人強行佔據顯失情理之平亦與約
章未合應請照會日本駐京大臣轉飭禁阻等因查中
日條約會議節錄第十節內載附屬鐵路之礦產無論
已開未開均應妥訂公允詳細章程以便彼此遵守等

在清國日本

語今詳章尚未妥訂竟於遼陽大榆溝等處將華人所
開煤礦勒令一律騰出並將煤堆限日搬盡更於鳳凰
廳城北山將業已禁止之私挖煤礦強行開採似此恃
強霸佔顯與條約不符又查東清鐵路俄約第四條內
載准公司在此枝路經過一帶地方開採鐵路需用之
煤計斤納價由總監工或其代辦與地方官公同酌定
不得過別人在該處採煤所納之稅數等語既有別人
在該地採煤可見此條並非專准該公司在該地開採
况遼陽右礦本在鐵路三十里以外日本人民何得強
行佔據相應照會
貴大臣轉飭該日本人於華人已開之礦勿得恃強霸
佔此項章程未定以前並不得私自開採各礦以符條
約而免弊端須至照會者

右 照 會
大日本國欽差全權大臣 林

光緒叁拾貳年陸月

式拾柒

四

在清國駐日本公使館

大島

明治三十九年九月五日
同 日 起 草
日 發 達

明治三十九年九月五日
同 日 起 草
日 發 達

主任
大島

大島新智苑

西園寺大臣

鐵道附近鑛山ノ件

一枚
字ノ下

外務省

南滿洲鐵道附近ノ鑛山ニシテ近來米東清
鐵道會社露清銀行又其他露國
人ノ專權又清國人ト共同ニ採
掘シ居ルモノ並數段中其中國人
ノ採掘ニ從事スルモノ其ノ鑛物種
類性質等詳ニ調査シ其ノ採掘
ノ狀況等詳ニ調査シ其ノ採掘